

男性に従属する地位から「女性は天の半分を支える」へ
——中国徽州農村地区における女祠・「鉄姑娘」・「三八紅旗手」などの分析——

馬 路

MA Lu

非文字資料研究センター 2016 年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】社会は女性たちに一定の期待と要求を持ち、社会的期待は女性の社会地位を反映する。中国社会の中で、表彰は女性に対する社会的期待の直接的な表現であり、政府、村人、宗族、親戚による特定の女性に対する評価である。それにより女性が得た権力と受けた束縛を見ることができる。異なる時代における女性の表彰は、女性の地位とその変化、および社会の要求を反映する。

本論は女性の表彰に着目し、徽州農村地区の女祠、牌坊などの表彰の分析により、清代と中華民国時期の女性に対する社会的期待の内容と原因を研究する。また「鉄姑娘」、「三八紅旗手」、「文明戸」などの表彰の分析により、計画経済時期および改革開放以降の女性に対する社会的期待の内容と理由を考察する。最後に、それぞれの時期における女性に対する社会的期待の変化によって生じた女性の社会的地位、および変化を究明する。

清代、中華民国時代において、男性の需要、宗族、村社会の統治、儒家倫理を基にした要求によって、社会は徽州の女性に「良妻賢母式」の女性になることを期待した。本意が問われることはなく、人生の選択の自由がなかった女性は、男性から厳しく差別され、抑圧されていた。

計画経済時期には、女性に対する村の建設者、「鉄姑娘」などの評価と表彰は著しく上昇した。徽州の女性は、全面的に社会的労働に進出し、自分の人生を把握することができるようになった。しかし、国が生産活動の期待に応じて出現させたその表彰は、女性が自発的に求めているものではなく、国の発展のために女性の「女性性」を犠牲にした建前の男女平等にすぎなかった。

1978 年改革開放以降、女性に対する社会的期待は主に、女性の経済的なリーダー、および精神文明を中心とする「文明戸」と「好媳婦」になる。女性が社会と家族に果たす役割は重要になり、それによって女性の社会的地位は大きく上昇したことが明らかになった。また彼女たちは能動的に選択する意識が強くなっている。女性に対する社会的評価は多分野において、多元化する勢いで発展しているといえるだろう。

From A Position as Attachment of Men to "Women Hold Up Half the Sky"

——Analysis of Female Shrine, "Iron Girl", "March Eighth Red-banner Pacesetter", etc.
in the Rural Area of Huizhou, China——

Abstract : Society has certain expectations and demands for women, and the social expectations reflect women's social status. In Chinese society, recognition is a direct expression of social expectation for

women, and it is also an evaluation for a specific woman from government, neighbor, clansman, and relative. Through analyzing these recognitions, it is obvious that the power that women gained and the bonds they received. Women's recognition in different times also reflects the status and changes of women, and the needs of society.

Through analyzing recognitions of women in the rural area of Huizhou, such as female shrine and memorial archway, this paper studies the content and cause of social expectations for women during the Qing Dynasty and the Republic of China. Besides, the paper also makes a thorough inquiry about the contents and reasons of social expectations for women during the planned economic period and Chinese economic reform by analyzing the recognition such as "Iron Girls", "March Eighth Red-banner Pacesetter", and "Civilized Family" etc. Finally, it investigates the changes and causes of women's social position by investigating social expectation for women in each period.

During the Qing Dynasty and the Republic of China, Huizhou folk respected a style of women as an understanding wife and loving mother, based on the demands of man, patriarchal clan system, and Confucian ethics. Women, without any personal freedom at all, were severely discriminated and suppressed by men.

During the planned economic period, praise and honor for women as village builder and "Iron Girl" increased significantly. Women in Huizhou have been able to devote themselves into social work, and have begun to grasp their own lives. However, these recognitions that were established in order to cooperate with state producing activities were not active pursuit of women, and they built up a seeming equality of men and women, but in fact neglected specific value of women.

Since Chinese economic reform in 1978, social expectations for women translates to bellwether of becoming rich, or good housewife focused on spiritual civilization. It is obvious that women are acting as the vital role in society and their families along with social status raising. And, their independent consciousness is from strength to strength, therefore the social evaluation for women is developing towards with diversification trend.

はじめに

女性は家族の一員としてだけでなく、社会の一員でもある。社会は女性たちに対する一定の期待と要求を持ち、社会的期待は女性の社会地位を反映する。中国社会の中で、表彰は女性に対する社会的期待の直接的な表現であり、政府、村人、宗族、親戚による特定の女性に対する評価である。それにより女性は客観的に権力を与えられ、また束縛され、地位が上下する。女性に対する社会的期待から、女性が得た権力と受けた束縛を見ることができる。異なる時代における女性の表彰は、女性の地位とその変化、および社会の要求を反映する。

本論は女性の表彰に着目し、徽州農村地区の牌坊、女祠などの表彰を分析することにより、清末と中華民国時期の女性に対する社会的期待の内容と原因を研究する。また「鉄姑娘」、「三八紅旗手」、「十星級文明戸」などの表彰の分析により、計画経済時期および改革開放以降の女性に対する社会的期待の内容と理由を考察する。最後に、それぞれの時期における女性に対する社会的期待の変化によって生じた女性の社会的地位、および変化を究明する。

山に囲まれた徽州は、⁽¹⁾中原の文化を基にして独自の徽州文化を生み出し、徽州地域という地理的、文化的な地区が形成された。地元の人々は朱子学を推賞し、「三綱」⁽²⁾「五常」を中心とした宋明理学が

徽州人の生活に深い影響を与えた。明代と清代において、徽州は宗族の意識が強く、宗族の祠堂や牌坊が林立した。宗族制度は族人に対する強い束縛力を持っていた。また、徽州は全中国および海外まで商売が盛んであった徽州商人の故郷である。徽州では商売の慣習や、商売がもたらす経済力が文化の発展に深く影響した。徽州の女性の生活は礼教、宗族、徽州商人などからの影響と束縛を受け、漢民族の女性の生活状態を典型的に反映した。それゆえ、徽州における女性の社会的地位を研究することは、歴史上の女性の地位を検討するだけでなく、歴史の変遷によって女性の社会的地位の変化を考察することもできる。

徽州は風景がよく、歴史ある観光地である。浙江省・江蘇省などの経済先進省に接するが、経済の発展は遅く、総体的に経済発展途上地区である。近年、徽州地区では、地方都市が急速な広がりを見せている。市街地周辺の農村では、都市化の進展による市街地建設のため、村の土地が大きく減少している状況にある。家屋と田んぼを失った村人たちは土地に対する依存度が低くなった。多くの村人は市内や市街地の経済開発区の工場に就職し、サラリーマンのような生活を送っている。また共産党政権において、宗族制度が壊滅され、一人っ子政策が実施されて40年近く経た現在、宗族の観念は薄くなり、伝統的な生育制度も変わっている。都市化の発展と共に、徽州の村落はその影響を受け、村の女性の思想や考え方も変化している。したがって、徽州のような経済発展途上地区において、都市化が女性の地位に与えた影響を考察することが可能である。

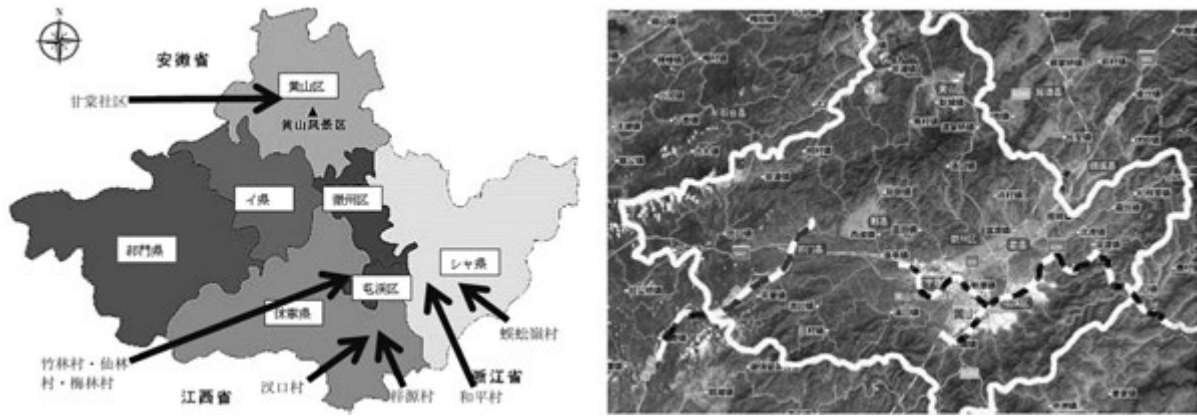
I 徽州の紹介

(1) 地理状況と地名について

本研究の調査地は筆者の故郷、安徽省黄山市である。黄山市はかつて徽州と呼ばれた場所で、安徽省の最南部に位置し、浙江省と江西省に境を接している（地図1）。



地図1 黄山市の位置（筆者作成）



地図2 黄山市の行政区画図・調査した村および地形図（筆者作成）

徽州はかつて新安とも呼ばれ、秦代に歙^{しや}県、黟^い県が設立されてから実に2200年ものときを経ている。現在徽州と呼ばれているのは、宋代に形成された「一府六県」（徽州府と歙^{しや}県・黟^い県・休寧^{きゅうねい}県・祁門^{きもん}県・婺源^{ぶけん}県・績溪^{せきせい}県）を含めた地域であり、徽州の文化を研究する徽学は主にその範囲を対象に研究を行っている。1987年に800年続いた徽州府が廃止となり黄山市が設立された。現在、黄山市は3区（屯溪^{とんけい}区・黄山区・徽州区）4県（休寧^{きゅうねい}県・歙^{しや}県・祁門^{きもん}県・黟^い県）を管轄下に置き（地図2）、その面積は9,807平方キロメートル、人口数は148万人（2011年末時点）である。現在の行政区画では婺源^{ぶけん}県は江西省の管轄下に、績溪^{せきせい}県は安徽省宣城市の管轄下に置かれている。中でも黄山市は徽州の主要部を占めており、徽州文化の源とも見なされている。現在、婺源^{ぶけん}県と績溪^{せきせい}県は黄山市の管轄区に所属していないが、2県の人々は徽州に対する相当高い帰属意識を持っている。それゆえ、筆者は婺源^{ぶけん}県と績溪^{せきせい}県を徽州文化の地理的領域に納める。

黄山市は丘陵地帯であり、民間でもよく「七山一水一分田、一分道路和莊園」（山が7割を占め、余った3割が川、田圃と莊園がそれぞれ1割を占める）と評されている。北西部には黄山山脈が、南部には天目山と率山^{そつざん}山脈が位置し、中部は155平方キロメートルと徽州地区最大の徽州盆地が広がる。市内にある黄山は中国国内有数の山岳景勝地であり、1990年に世界複数遺産にも登録されている。

黄山市は水資源が豊富な地域であり、二つの川が市の外部と接している。東側は横江^{おうこう}と率水^{そつすい}が屯溪^{とんけい}で合流し、新安江^{しんあんこう}となって浙江省へ流れ、銭塘江^{せんとうこう}に合流している。西側は祁門^{きもん}県内の閭江^{りやうこう}が鄱陽湖^{はようこ}へ流れている。徽州は昔から新安江によって浙江省、江蘇省南部とつながっている。

7割が山地を占める徽州では、狭い田地が山の谷間や盆地に点々と分布している。土壌は酸性で食糧の産量は低いが、茶葉と林業が盛んである。

(2) 徽州の宗族と徽州商人について

徽州は山に囲まれた閉鎖的な地域であるが、漢代から北方の貴族が戦乱を避けるために徽州へと転居し、それがこの地における中原文化の伝播につながったといわれている。父系血縁を重要視していた貴族は何世代も経るうちに、徽州にも強い宗族社会を築くことになった。宗族文化とは、儒教を基礎としており、宗族内の血縁的つながりと地縁的つながりを強固にしなが、宗族の政治、経済地位と族人の団結力を強調する文化を指す。⁽³⁾

教育を重んじる徽州では、宋代から多くの文臣が輩出された。南宋から全国に広まった朱子の思想

は徽州にも深く影響を与え、新安理学として形作られ、それは徽州の文化の柱となった。朱子学を学ぶことは徽州社会の伝統であり、朱子家礼が徽州人の生活と人生儀礼にとって規範となっている。それゆえに、徽州は「東南鄒魯」⁽⁴⁾と称えられることがある。新安理学は宗族社会を固め、それに呼応するように、徽州の宗族社会は新安理学を促進したのである。

徽州において大きな宗族は名門とされ、そうした宗族は家庭と社会地位を重視し、宗族の声望を保つために婚姻の約束を取り交わす際、「門当戸対」、すなわち家柄の釣り合いを重視する。

自然に恵まれないこの地域にとって、増大する人口とそれを支える食糧の確保は厳しい問題である。徽州では隣接する浙江や江西からの水路・陸路での食糧調達に頼り、「一日米船不至、民有飢色、三日不至有餓殍、五日不至有屋奪」という状態になる。徽州での食糧不足が、「全国で商売をする徽州商人を輩出する社会的背景となった」⁽⁵⁾。

宋代に誕生した徽州商人は木材、茶、紙、墨などの徽州の特産品を扱い、臨安（現杭州市）や揚州で商売をした。明代には両淮地域の塩を専売し、揚州の塩商人は徽州出身が多かった⁽⁶⁾。明代後期になると、徽州商人は「塩の専売により、商売の範囲を全国および海外にまで広げた」⁽⁷⁾。その後、清代の康熙年間から乾隆年間までの百年間は、徽州商人の全盛期ともいえる時代を迎える。巨額の財を得た商人たちは故郷に帰って「拓祠宇、置義田、敬宗睦族、収恤貧乏」⁽⁸⁾（祠堂を広げ、祠堂に所属する田地を購入し、族人を助け、生活に窮した人を救済する）といわれる状況をもたらした。彼らは立派な家屋や祠堂を建て、文教事業に投資し、宗族の後輩に勉強させて官途に就かせようとしたのである。すなわち、徽州商人は経済と物質の両面から宗族を支えたといえる。商売を維持し、拡大するために、各家族や宗族の間には、何世代にもわたる付き合いと通婚の習俗が保たれてきた。

巨額の富を得ることのできた徽州商人は揚州、杭州、蘇州などの大都市で商売し、そこで豊かな生活を手に入れ、贅沢な生活様式を故郷に持ち帰った。清代の小説や日記に、徽州商人の贅沢な生活について記録したものも少なくない。

(3) 調査地の概説

現時点で資料などに記録された徽州の女祠は13軒あり、10か所の村に分布している。筆者は女祠を調査するため、2015年8月に〔表1〕の10か所の村に行った。残っている女祠の写真を撮り、村人から女祠に関する思い出や昔話などを聞き取り、女祠に関わる資料を集めた。調査で得た資料によって拙文「徽州地区の女祠に関する一考察——女祠の祭祀、分類及び機能について——」（2017）を作成した。13軒の女祠のうち、清懿堂（棠樾村）、即内^{ちんかん}（呈坎村）は有名な観光地になっているが、ほかの女祠は村の古い建物として毎年の旧正月に掃除され、新しい春聯が替えられるのみである。現在の村民たちは女祠や祖先祭祀に関してほとんど記憶がなく、40～50代の村人さえ女祠の歴史がわからず、文化の断絶が生じている。彼らにとって女祠は村の共同財産であり、観光業による利益を望んでいる⁽¹⁰⁾。



写真1 紹瀛郷和平村のH・CLさんへの取材(筆者撮影)

本論では、筆者が以前、徽州の農村女性の結婚、育児、

就職などについて黄山市屯溪区の竹林村、梅林村、仙林村、休寧県しげんの梓源村を中心に行った聞き取り調査をふまえ、1960～70年代の社会主義農村建設者、「鉄姑娘」、80年代以降の女性の「村経済エリート」などを調査するため、女性に表彰を授ける政府機関である黄山市「婦女連合会」の元主任L・WLさんに聞き取り調査を行った。L・WLさんの紹介により、2017年2月に休寧県しやこうの汉口村へ、5月末～6月に歙県ごこうれいの和平村（写真1）、黄山区かんとくの甘棠社区で調査を実施した。

竹林村は黄山市屯溪区の北西部に位置し、交通の便がいい村である。梅林村と仙林村に隣接し、三つの村の村民たちは頻繁に往来し、通婚も多く、互いに強い関係を保っている。2001年から安徽省が造った道路と大型ホテル建設のため、村の土地が急速に買収され、梅林村と竹林村の多くの村人は新築の一戸建ての団地に移住し、町や近隣の工場で働きサラリーマンのような生活を送っている。現在、ほとんどの村民は、町の生活スタイルを模倣し、それを自慢している（写真2-1、2）。

しかし、休寧県しげんの梓源村、歙県ごこうれいの蜈蚣嶺村では異なる生活をしている。山間に位置し、村と町をつなぐ舗装道路はあるが、交通が不便な典型的な山村である（写真3-1、2）。ほとんどの村の若者が浙江省に出稼ぎに行くため、村の生活はあまり都市化の影響を受けていない。昼間は人が多く、村人が家の前の庭に座り家事をしたり、村の空き地に集まりおしゃべりしたりする光景がよく見られる。この二つの村は山に囲まれ、土地が少なく乏しい自然環境のため、1960～70年代に国の呼びかけに



写真2-1 収用された竹林村の土地に建てた「黄山碧桂園鳳凰ホテル」（筆者撮影）



写真2-2 現在竹林村の村人が住んでいる「農民新村」（筆者撮影）



写真3-1（右上）蜈蚣嶺村における泥で造られた家屋（筆者撮影）
 写真3-2（右下）梓源村における国家に「貧困家庭」と評定された家の分布図（筆者撮影）

こたえ、村で茶業を起こすため全村の協力で広大な棚田を築いた。当時、村の女性は大変活躍をした。

II 伝統社会における女性に対する社会的期待

(1) 貞孝節烈婦のために建てた貞節牌坊

① 牌坊について

「牌坊」とは、中国の伝統的建築様式の門の一つであり、^{はいろう}牌楼または略して坊と呼ばれ、空間を区別する建物である。たとえば、横浜中華街の牌楼善隣門、朝陽門などは中華街の入り口として建てられている。それ以外、牌坊は忠孝節義の人物を顕彰するために、家、墓、宗族の祠堂などの近くにも建てられた。

徽州地区は、「牌坊の故郷」として有名である。中国に現存している牌坊は1064基である。黄山市には104基あり、全国の都市の中で1位の数となっている。そのうち80%以上が歙県に集中している。⁽¹¹⁾

徽州で賞揚機能を持っている牌坊は、ほぼ2種類に分けられる。①「功德」（功績と徳行）牌坊類：偉業を成し遂げた文化的功労者と政府の役人、科挙に及第した学生、義挙と善行をした人を表彰する。

②節孝牌坊：貞孝節烈婦と孝行息子を表彰する。その中で女性に対する表彰は「貞節」「節孝」「節烈」⁽¹²⁾の三つの項目がある。

貞孝節烈婦を表彰する牌坊は「貞節牌坊」、「節孝牌坊」、「節烈牌坊」⁽¹³⁾と呼ばれ、上記した節孝牌坊類に所属する。⁽¹⁴⁾徽州の牌坊はほぼ「専坊」、すなわち特定の対象一人のために建てられた建造物である。歙県だけで35基存在する。⁽¹⁵⁾清代後期、公金で造られた専坊は少なくなり、地域の貞孝節烈婦を合同表彰する「総坊」が建てられた。

『清会典』に記載された貞節牌坊の申請資格を持っている女性は、妻妾問わず、年齢は30代から50代までで節を守る者（15年以上節を守り、50代に亡くなるのも含む）である。⁽¹⁷⁾清代では、明代に比べ貞節がより強く提唱されたため、貞節牌坊の申請資格である年齢幅が広がった。明代には、「県→府→按察院→礼部→朝廷」という流れで貞節牌坊を申請した。地元の学校、長老代表が県政府に報告し、県政府が事実を確認して府政府へ上申し、府が照合して按察院に提出し、最後に礼部から朝廷に上申する。清政府は基本的には明代の流れに従い貞孝節烈婦を表彰し、申請の流れを簡略化し、異郷で申請する規則まで公布した。申請資格の拡張と申請の簡略化により、清代に表彰される女性の数は激増した。

厳しい審査がある表彰は、貞節を守る女性たちがすべて公平な立場にあったとはいえない。貧しい家に生まれた人は財力が弱く、各級の官吏と関わりを持つことが困難であったため、家族が女性の表彰を「申請しても失敗した例もある」⁽¹⁸⁾。政府の表彰は、女性自身の持つ優れた道德だけで決定されるのではない。その女性の背後にある家族や宗族の権力、社会地位、金銭、人脈などをめぐって争った結果、表彰が決定するのである。

② 牌坊の構造

貞節牌坊にはそれぞれ異なる材質と形がある。ここでは歙県棠樾村の鮑文齡妻節孝坊^{ほうぶんれいさいせつこうぼう}を例として説明する。

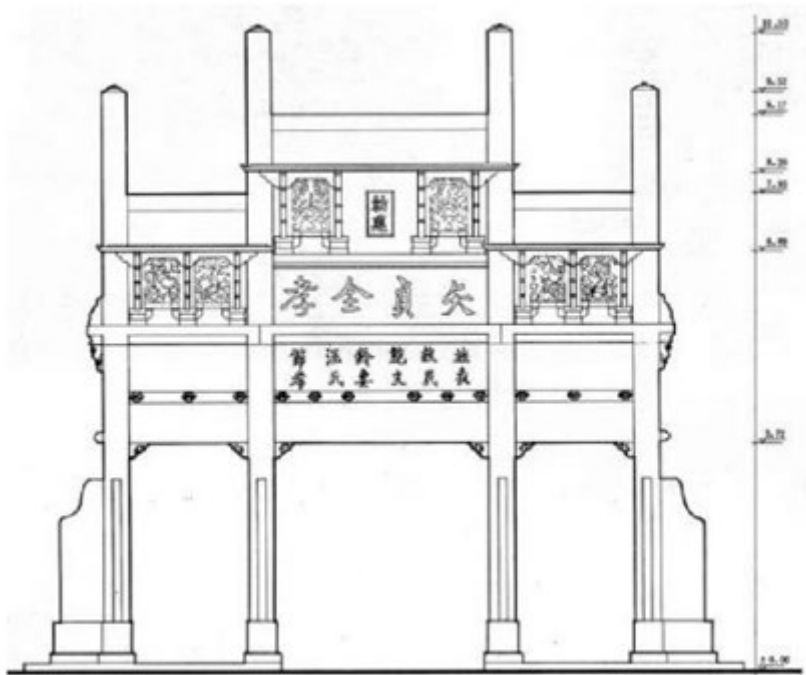


写真4 (上) 棠樾村の鮑文齡妻節孝坊 (筆者撮影) (下) 鮑文齡妻汪氏節孝坊の正面図 (16)

鮑文齡妻節孝坊 (写真4) は歙県棠樾村にあり、鮑氏宗族の祠堂の隣に7基並んでいる牌坊の3番目にあたる。鮑氏宗族の牌坊群の中の貞節牌坊は、ほうぶんれいさいおらし せつこうぼう 鮑文齡妻汪氏節孝坊、ほうぶんえんけいさいご せつこうぼう 鮑文淵継妻吳氏節孝坊の2基である。

鮑文齡妻汪氏節孝坊は、乾隆41(1776)年に庶民の鮑文齡の妻である汪氏を表彰するため建造されたものである。汪氏は25才で夫を亡くして以降、節を守り再婚せず、舅姑に親孝行し、息子を歙県の名医に育てた。45才で病気により亡くなった汪氏の生誕80年目に、鮑氏宗族が朝廷に申請し、表彰の牌坊が授けられた。この節孝牌坊は石灰岩で造られ、高さが11.1メートル、幅が8.75メー

ルある。「四柱三間三樓冲天」（四つの柱で3間口があり、3階建てで柱が屋根より高い）式の東向きの牌坊である。両面の「一階」の「額板」に「旌表故民鮑文齡妻汪氏節孝」と彫刻され、表彰対象を明らかにしている。「二階」の「字牌」に、汪氏の行為を賛美する言葉「矢貞全孝」（東面）「立節完孤」（西面）を刻んでいる。その上に「勅建」と刻んでいる「小字牌」があり、これは乾隆皇帝の恩典で造られた牌坊であることを表している。

③ 貞節牌坊の機能

貞節牌坊は、夫が亡くなった後、再婚せずに親孝行と子供の扶養に責任と義務を尽くし、家庭を支えた女性を表彰する。徽州の貞節牌坊は、普通の村の女性が国から与えられる最高の精神的な奨励と見なされ、女性の価値はそこに認められる。つまり、貞節を守り、舅姑に親孝行し、息子を育てることにより、女性は表彰され、永遠に記念されるのである。当時の女性は一生の自由と幸せ、さらに自分の命を条件として、無上の光栄であった貞節牌坊を求めた。

また貞節牌坊は宗族にとって、族内の女性を教化する機能がある一方、本宗族の権力を示す重要な手段であった。より多くの人に見せるため、貞節牌坊は村の入り口あるいは村人が集まるところに建てられ、日常的に教化の機能を果たした。10メートル以上ある立派な牌坊は視覚的にインパクトを与え、その威厳と神秘さが客観的に宗族の地位と権力を高めた。上述したように、貞節牌坊は単に国からの表彰だけではなく、その背後に家や宗族と密接な関係を持つ。宗族の権力、社会地位、金銭、人脈など、さまざまな利益ともつながっている。したがって、このような事情が徽州地区において、各宗族が熱心に族内の女性の表彰を申請する原因となっている。

牌坊を建築するためには朝廷の許可が必要である。政治的な宣伝の目的があり、その条件を満たす女性の事績からしか朝廷から建築許可をもらえない。村社会において牌坊の建設は、国の意思が直接的に表現されたものといえる。牌坊で貞孝節烈女を表彰するのは、民衆に対する教化機能を果たす一方、実際は、政府による「良妻賢母式」の女性への社会的期待を表している。貞節牌坊という表彰の内容は、女性が妻と母親としての責任と義務を強調する。女性が良妻になり賢母になることを提唱する牌坊は、清代において女性に対する期待を表したものである。

牌坊の建設は、徽州商人にとって現実的な意味がある。多くの徽州商人は家を離れて商売をし、数年から数十年を隔て実家に帰ることができた。徽州商人の夫婦は一緒に生活する時間が短く、「一世夫妻三年半」（夫婦になるが、一生涯に夫婦生活が3年半しかない）という徽州のことわざが、徽州商人の夫婦が長期にわたり離ればなれの生活を送る実情を物語っている。それゆえ、徽州商人にとって、「良妻賢母式」の女性に対する期待、妻の貞節と責任感に対する要求はより切実だと考えられる。

(2) 宗族の女性のために建てた女祠

① 徽州の女祠について

1949年解放以前、徽州は、宗族の勢力が強かった地域であった。儒教の教えにより、祖先の血筋を記録した族譜を編纂し、先祖の位牌を祭る祠堂を造った。成年の男性は亡くなると、宗族の祠堂で子孫に祭られた。徽州は明代から商業が栄え、宗族が発達し多くの祠堂が造られた。

史料によると、徽州地区では女性の位牌だけを祭る位牌堂である女祠、つまり女性の祠堂がいくつ

か存在した。女祠の建造は本来儒教における「礼」に従う行為ではなく、ほかの地域では、現在のところ、その存在はほとんど報告されていない。

表1 女祠の分布（筆者作成）

県	村	番号	女祠
歙県	棠樾村	①	●清懿堂
	潭渡村	②	壺徳祠
	西溪南村	③	◎思睦祠
	長齡橋村	④	鄭家女祠
	澄塘	⑤	(呉氏女祠)
徽州區	呈坎村	⑥	●則内
		⑦	◎前羅家廟女祠
		⑧	一善祠
		⑨	姑婆祠
休寧県	黄村	⑩	(黄村女祠)
祁門県	渚口村	⑪	庶母祠
	芦溪村	⑫	●衍正堂
	汪村	⑬	●怡燕祠

* 「●」は祠堂が現在も残っている。「◎」は一部分が残っている。ほかの女祠は消滅した。

* 「()」は正式の名がない女祠である。



地図3 調査地（筆者作成）

地図で見ると、現存の女祠は徽州の東部に集中し、約7割が歙県内にある。⁽¹⁹⁾ 歙県は隋代から中華民国38(1949)年まで、徽州府の治所が置かれたところである。そのため、歙県は徽州の政治・経済・文化の中心として栄え、名門や大商人を出した宗族もここに多く集まった。明代の中後期から清代の中期まで建造された女祠は歙県に集中した。清代後期から女祠の建造は歙県から徽州の西部祁門に移った。清代中期は徽州商人の全盛期であり、商売は明代に比べ大幅に増えた。後期以降、塩専売を中心とした商売が衰えた一方、祁門出身の徽州商人は紅茶の販売を世界的に広げ、勢力を拡大させた。紅茶販売は祁門の経済を発展させ、清代後期および中華民国時代には祁門で女祠が多く建造されるようになった。

② 女祠の紹介

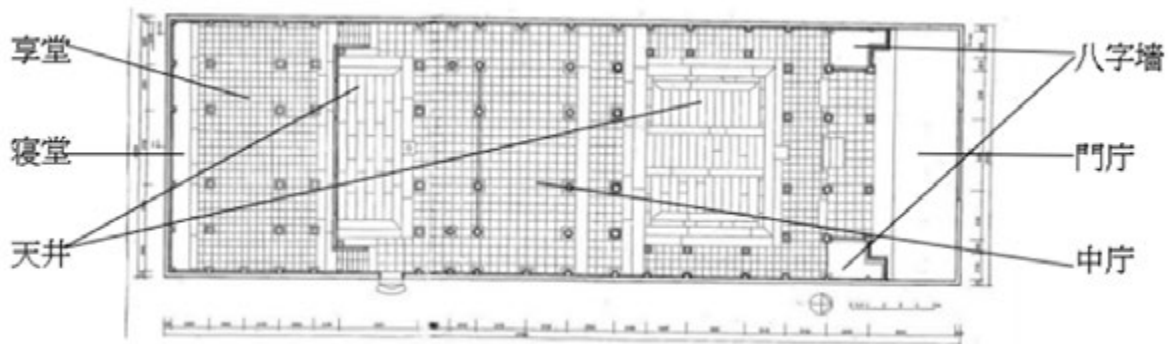
筆者は上記の拙稿にて女祠の構造や祭祀についてすでに詳しく紹介したため、ここでは、徽州の女祠を簡単に説明する。

女祠が現存している呈坎村の則内と棠樾村の清懿堂を例として、建造物の構造を説明する。

清懿堂は歙県棠樾村に位置する。となりの男祠（男性祖先だけを祀る祠堂）である敦本堂と違い、逆方向の北向きに建っている。清懿堂は総面積 818 平方メートルである。位牌堂は、一宗族の誇りとして、立派な門が造られるが、清懿堂は入り口が小さくシンプルな構造である（写真 5）。



写真 5 男祠の門（左）と女祠の門（右）（筆者撮影）

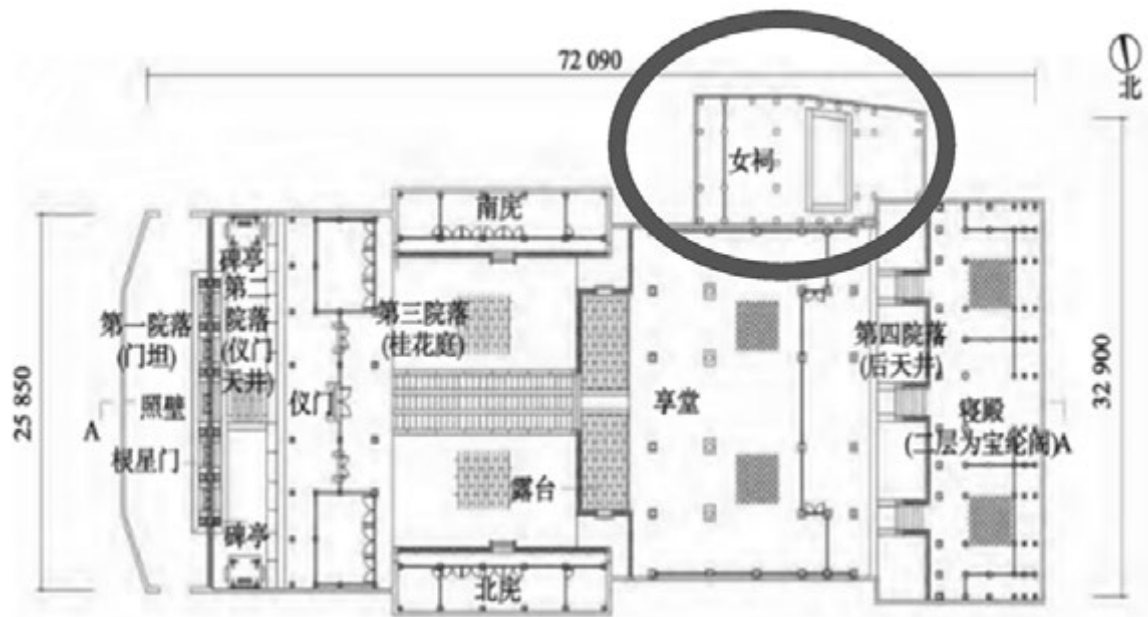


(20)
図1 清懿堂の平面図

清懿堂は「三進二天井五開間」という構造である（図1）。中庭にある「天井」により、清懿堂は三つの部分に分けられる。右からいうと、村民たちが集まる場所「門厅」、宗族の人々が族内の大切なことを検討する議事堂「中厅」、祖先を祭る場所「享堂」、いわゆる「三進」構造である。「享堂」の奥は「寝堂」であり、祖先の霊が寝ているところである。

「則内」は徽州区呈坎村の羅氏宗族の女祠であり、羅氏宗族の男祠である「貞靖羅東舒先生祠」（以下羅東舒祠と略称する）に付属している。明代万曆 40（1612）年、22 代の先祖羅応鶴は、羅東舒祠が規模を広げたときに羅東舒祠の南に則内を建て加えた（図 2）。羅氏宗族は当初、妻と継母の位牌しか女祠に入れなかった。羅東舒祠がリフォームされた後、羅応鶴は「妻も妾も族譜に載せられる」と宗族の約束を変え、妻や妾も女祠に入れた。

則内は東向きの羅東舒祠と反対に、西向きに建っている。則内には正門がなく、壁に一人しか通れないほどの狭い門がある。即内の面積は総面積の 10 分の 1 以下で、高さも羅東舒祠主体部分の 3 分



(21)
图2 羅東舒祠の平面図



写真6 則内の正門と内部構造 (上) 羅東舒祠の寝堂の一部分 (下) (筆者撮影)

の1である。女祠には位牌の棚、享堂、物置と三つの部分しかない。極めてシンプルなデザインである (写真6)。



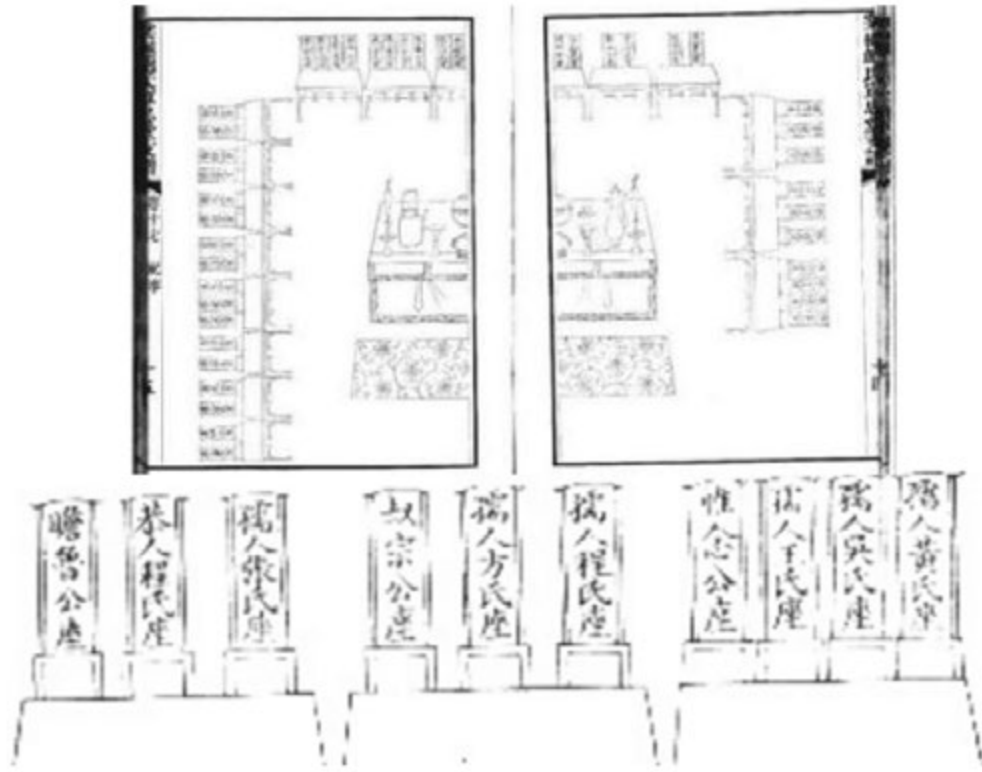


図3 棠樾鮑氏宣忠堂の祭位図および拡大図

③ 宗族祠堂における女性の祭祀

女祠の祭祀について、文献に詳しい記録は残されていない。呈坎村羅氏の^{ちんかんそんらし}34代子孫羅会^{らかいじょう}定氏の話によると女祠の祭祀は普通の宗族の祠堂とほぼ同じであることがわかる。

『家礼』には、祠堂において男女共同祭祀をする際の規則が決められている。したがって、徽州では多く『家礼』に従い、夫妻共同祭祀を行った。夫婦の位牌は卓に左から右に並べられ、子孫の祭祀を受けた(図3)、妾は祖先祭祀から除外された。

しかし、一部には『家礼』と異なる解釈も生まれた。祠堂では男性しか祭らず、男女が別々の部屋で祭祀される場合もあった。男性しか祭らないことについて、朱子の弟子である程頤が書いた『二程集』には、男性が夫婦の代表であり、男性を祭ることは、夫婦二人を一緒に祭ることである(「祭只一位者、夫婦同享也」)⁽²²⁾と記されている。⁽²²⁾歙県潭渡村の黄氏宗族は女祠を建てる前は祠堂で36世代の⁽²³⁾男性祖先しか祭らなかった。

これを受けて、男女別祭について呈坎村の羅氏の族譜では、異なる家に生まれた夫婦二人が同じ祠堂に祭られると、先祖の霊が不安になる、それゆえ男女の霊を分けて、男女を別々の部屋に置くべきだと⁽²⁴⁾解釈した。⁽²⁴⁾歙西の洪氏の族譜には、男女別祭が礼に相応しいことだと⁽²⁵⁾述べられている。⁽²⁵⁾以上のような男女の位牌を別々に祭る解釈から、徽州には女性のみを祭る女祠が建造された。

表2 建築年代順による女祠の並び（筆者作成）

番号	年代	位牌堂	村	一戸建て	祭られた人	公式の祭祀
①	明治11年	前羅家廟女祠	呈坎村	×	妻	○
②	明 万曆	則内	呈坎村	×	妻→妾	○
③	明 万曆末期	(呉氏女祠)	澄塘村	×	?	?
④	明 崇禎	思睦祠	西溪南村	×	妻?	?
⑤	清 康熙	壺徳祠	黄村	○	妻	○
⑥	清 乾隆	一善祠	呈坎村	×	再婚した女性	?
⑦	清 嘉慶	清懿堂	棠樾村	○	母→全宗族の嫁	○
⑧	中華民国時期	庶母祠	渚口村	○	妾	×

〔表2〕は調査した女祠を建造された年代順に並べたものであるが、13軒のうち年代が明白な女祠は8軒である。

女祠に祭られる女性祖先は基本的には「妻」に限られる。ところが、〔表2〕によると、②、⑥、⑦、⑧では女祠に「妾」も祭られている。

伝統的な中国の婚姻制度は、「一夫一妻多妾制」であり、正妻以外に、多くの息子を求めるためや、財産や地位の高さを誇示するため、「妾」を娶ることが可能であった。⁽²⁶⁾ 法的に認められた男性の正妻が「妻」である。「妾」は正式な家族員ではなく、「隷属的な立場にある」⁽²⁷⁾。したがって、「妾」の死後、その位牌は作られることも祭られることも基本的にはなかった。

ところが、徽州では明代から息子を産んでくれた「妾」への感謝や、成功した「妾」の息子である庶子が、親孝行と生母を尊び、また自分の社会的地位を顕彰するために「妾」であった母を女祠に祭る例が出てきた。このように、宗族の祠堂に祭られない「妾」や庶子の母の地位を高めることは「礼」でいえば、嫡庶の身分を乱す行為だが、庶子にとって親孝行、夫にとって「妾」への思いやりを示すことになり、徽州では女祠に「妾」を祭ることが有力な商人の間で行われるようになった。徽州地区の女祠には、族譜に記載した正妻を祭る「妣祠」でも、「妾」のため建造した「庶母祠」でも、その中心が「母」になることである。すなわち、息子を生むことが子孫に祭られる必要な条件である。

女祠の建設には、一定の社会と経済条件が必要である。史料から見れば、女祠が建てられた宗族には、高官を務めた、あるいは商売で大金持ちになった子孫がいる。前者の例として、呈坎村の一善祠の建造者である羅廷梅⁽²⁸⁾は、清代乾隆丁丑（1757）年に科挙の最後試験に合格し、進士になり、奉直大夫（五品）になる。後者は棠樾村の塩商人鮑志道⁽²⁹⁾と鮑漱芳⁽³⁰⁾である。二人は清代の両淮総商を務め、塩商人のリーダーになる。潭渡村の黄氏宗族も清代初期に有名な塩商人を輩出した宗族である。⁽³¹⁾ 祁門県の芦溪、渚口村が女祠を建設する時期は清末、中華民国初期であり、それは祁門紅茶を販売する商人の最盛期である。したがって、高い社会的地位と豊富な経済力は女祠が建てられる現実的な条件である。

以上の内容を分析すると、女性の先祖が祠堂に祭られない理由は、徽州宗族の祭祀制度における地方独自の規定に属する。しかし、これらの地方独自の規定は永久不変ではなく、柔軟性と融通性があり、時代の変遷に従い、あるいは実際の状況において、変化する可能性がある。現存の史料では、宗族の女性のために女祠の提案や資金集め、および建設の過程で族長や族人がそれを反対する事例はまだ見たことがない。すなわち女祠の建設は、宗族制度の黙認と許可を得ているといえる。宗族の祭祀

制度の柔軟性と融通性は、女祠が建設される重要な要因ではないかと考えられる。

④ 女祠の機能

死後「孤魂野鬼」(供養する後嗣がなく祭祀してもらえない霊)にならないようにという死生観が強かった伝統的な社会においては、夫および夫の宗族に、忠誠と孝行を尽くす女性は、子孫に祭られ、宗族の祖先になる資格があった。

貞孝節烈婦になると宗族の祠堂に入ることができ、通常の列より高いところに置かれ、公に祠堂に招かれ毎年の祭祀費用の免除などの待遇を受ける。また貞節の模範だとされるが政府の表彰基準に達しない女性には、宗族が「貞」、「節」などの漢字が含まれた追号をつけている。

宗族における女性祖先の祭祀は、農村の女性たちに対する基礎的で普遍的な賞揚である。宗族は女性への要求を祖先として祭られる本願と結び付け、日常の祭祀を通してその観念を教え込む。祠堂には家族と親戚の位牌が置かれ、身近な事例から一般の女性である彼女たちも賞揚が可能であると信じさせる。祭祀される女性の範囲が広がると共に、より多くの宗族の女性はその規範を自発的に実行した。

女祠の建設は、現実的には一宗族内の女性先祖の霊が祠堂に祭られ、慰められるかが問題であるが、一方では宗族の女性祖先に対する子孫の評価と関わる。現存の史料から見れば、徽州に女祠が建設される原動力は、族内の女性先祖が高潔な婦徳であり家族に対する長年の貢献が認められることである。宗族で女性の貢献と役割を明記した『潭渡孝里黄氏族譜』はその典型である。

「吾郷僻在深山之中，為丈夫者，或游学于他郷，或服賈于遠地，嘗違其家数年、数十年之久，家之勉維持，惟母氏是頼。凡子之一身，由嬰及壯，扶養教誨，从師受室，以母而兼父道者多有之，母氏之恩何如其深重耶！正幼恃母慈，長承母訓，以有今日。」⁽³²⁾

山に囲まれ、田んぼが少ない徽州では、7～8割の徽州の男子はやむを得ず家を出て外で商売をすることになる。⁽³³⁾ 男性が長期不在のため、夫または父親としての責任はすべて家に残る女性に転嫁される。彼女たちは舅姑に対して孝行し、自分の子供を育て、一人で息子、母親、父親の役と責任を担っている。息子の成長において、母親の苦勞と教育があるからこそ、子供たちが立派になれると考えられている。さらに夫の宗族に寄付し、夫が宗族に貢献したいという願望を実現させる。彼女たちは勤勉で、やさしい母親であり、賢明な妻(および妾)である。いわゆる「良妻賢母式」の女性である。それゆえ、女祠の建設は「良妻賢母式」の女性が家族に対して行ってきた貢献、および高潔な婦徳であることを認めることである。女祠が建設されると、祭られた彼女たちの事績は広く伝えられ、教化の機能を果たす。また家に残る女性が認められ表彰されることは、長期的に家を離れる商人にとって慰めの役割を果たす。家に残る妻が女祠に祭られる女性の先祖を見習い、舅姑に孝行し、子供を育て、家が安定することで、彼らも安心して外で商業を続けることができる。徽州商人には、女祠を通して「良妻賢母式」の女性となることへの期待を表す現実的な要求があるといえる。

上述したように、女祠は、女性の先祖が家族に対する貢献を認め、高潔な婦徳を表彰する社会的評価や教化の機能を持っている。女祠は、既存の宗族祭祀制度に違反しない前提で存在し、その機能を実現する。女祠は、規模や構造および細部における特別な設計により、男性宗族の祠堂より地位が低いことを表明する。それによって、女祠の建造は宗族の族人から許可をもらい、各原因で女性の先祖

が祠堂に祭られない規則を修正する。そのため、潭渡の黄氏宗族は女祠の建設が「前代の不足を補う」（「補先世之闕遺」）のである。女祠は宗族祭祀制度に対する補正であり、またそれによって宗族の女性に対する「良妻賢母式」の社会的期待が表される。

(3) ほかの表彰

① 文人に記録される女性

極めて少ない中央政府の表彰および宗族の基本的な表彰を除き、徽州では、地方のエリートや文人がそれらの女性の事績を地方志、族譜、文集に収録し、後世に名を残した。

明代には政府に表彰された女性だけが地方志に載せられる資格があった⁽³⁴⁾。しかし、各地方志の作者は融通をきかせ、資格のない多くの貞孝節烈婦の記載を可能にした⁽³⁵⁾。編纂者はモラルが乱れた社会では、貞孝節烈婦がいればこそ国が成り立つと評価したためであった⁽³⁶⁾。

宗族は族譜を編纂するとき、族人である文人に族内の貞節と評価される女性の伝記のほか、有名な伝記、また伝記の序、貞節の行為を表彰する扁額や対聯も書かせた。たとえば棠樾村の清懿堂では、清代の名大臣である曾國藩が「貞孝両全」という扁額を書いた。名人や地位が高い役人は権威と公信力を持つため、道徳が優れた宗族の女性が彼らに認められれば、信頼度は高まり、価値ある栄光がもたらされる。

民衆を教化し、社会の気風を正しくすることを自分の務めとする地方のエリートは、貞節の意識を発揚するため、自発的にその事績を記録し、文集にする。地方志では、数多くの貞孝節烈婦が記録されるため、事績は簡略化され名前のみが掲載された。しかし、地方のエリートは民衆を教化するため、地方志とは別に女性の物語を詳しく記録したため貞孝節烈婦は後世に名と事績を残すことになる。

② ほかの貞節祠堂

宗族の女性を祭祀する女祠を除き、各県志と府志には貞孝節烈婦を祭祀するため建造された祠堂——節孝祠、貞女祠、節烈祠（総称貞節祠堂）に関する記載もある⁽³⁸⁾。貞節祠堂では、歴代の貞女、節烈として表彰された女性だけを祭る。普通の女性は除外され、祭られた女性の後代あるいは親戚は貞節祠堂に入ることができない。

県志と府志に記載された貞節祠堂に関する資料には、ごく簡単な説明のみで建造者についてはほとんど不明である。1軒だけは報告があり、徽州府の知府である黄曾源^{こうそげん}で民宅から改造されている。これは地方政府が貞孝節烈婦を表彰するためであった。しかも普通の祠堂と同様に「毎年2回の祭祀を行い、祭祀費が銀3両」と決められた⁽³⁹⁾。官設の祠堂であるため、祭祀の費用も朝廷からの出資ではないかと推測される。

官設以外、里人、宗族の人が貞節祠堂を建造した場合もある。『新安女史徴』の「淳安県重建烈婦祠碑」には、次のような話が書かれてある。「清代の順治年間、葉氏は夫の死に殉じ、川に身投げした。葉氏は烈女と褒められ、故郷に連れられ、村の神様になり、村人を守った。地方の名士は記念のため、葉氏に烈婦祠を造り、石碑を立てた。康熙時期に洪水で祠堂と碑が倒されたが、村人は祠堂を再建し、民衆を教化した。また「汪氏……姑病、割股以療……里人立祠祀焉⁽⁴⁰⁾」。「呉烈女……未嫁夫客死於盜、自經卒……族人建正節祠祀焉⁽⁴¹⁾」。婺源県の施虹玉は、両親を失った幼い弟を育て結婚もしなかった先

祖の伯母さんに貞孝の祠堂を建てた。⁽⁴²⁾

子孫が祖先祭祀のために造った宗族の祠堂に比べ、貞節祠堂の建造者は必ずしも宗族の人とはいえない。血縁の遠い宗族の人や里人および地元の統治者が貞節位牌堂建造の理由について、王伝満は節烈な女性を礼賛し、彼女たちの亡霊を慰め、子孫への激励および世間への教化という四つにまとめた。⁽⁴³⁾

また貞節祠堂は貞烈な女性を祭り、いわゆる人間を祭祀する場所であり、普段は神と関わらない。上述した葉氏の物語によれば、自然災害や疫病のときには、地元の人が烈婦祠で祈願すると、効き目があるといわれる。それゆえ、葉氏は、女性は貞節を守るべきだと教化した上で、里人を守る女神になった。淳安県の烈婦祠は普通の貞節祠堂より機能が複雑である。民間信仰と関わり、烈婦を祭る貞節祠堂であると共に、神を祭る廟でもあるという二重の構造を持っている。

最高級の表彰である牌坊と基礎的な表彰である宗族の女祠の間には、大きな差がある。それによって、地方志、族譜、文集における貞孝節烈婦の記録および、社会各界に建てられた貞節祠堂は、貞節を守る女性の霊を慰め、彼女らに適切な栄光をもたらす一方、社会教化活動の一環として、機能を発揮する。

伝統社会では女性に対する表彰と賞揚は貞節と孝行に集中する。夫に対する節操を守り、夫の親に親孝行し、夫の息子を育てる女性は、家族および社会に認められる。宗族は、子孫の供養をもらえるような祖先になりたいという女性の願望が叶うように、地元エリートや文人に彼女たちの事績を記録させ、後世に名を残させる。地方政府などは貞節祠堂を造り、適切な表彰を与える。最高級の表彰は皇帝の許可を得て、立派な貞節牌坊を賜ることである。

徽州では、男性族人が家庭の安定を維持し、宗族人口の増長を保証することが、宗族を維持する基礎である。女性に関する表彰と賞揚はまさに宗族維持の一環として役に立つ。また族人の女性が受けた表彰は宗族に光栄をもたらし、ほかの族人の女性の教化につながる。女性に関する表彰と賞揚を運営するのは宗族の男性と地方のエリートである。表彰を受ける背後には、宗族の権力、社会地位、金銭、人脈などをめぐる争いがある。地方のエリートは民衆を教化し、社会の気風をよくすることを自分の務めにする。彼らは貞節意識の提唱により、理想的な社会や国になることを希望した。女性は生活も死後の祭祀も独立できず、男性と宗族に従属して生きるしかできない状態において、伝統的な男権社会に認められるため、男性が決めた要求に応じて行動しなければならない。このような状況において、女性は男性の私有財産としてほかの選択肢がなく、ただ期待される「良妻賢母式」の女性にならざるを得ない人生であり、家族に貢献することだけが女性としての価値を実現する。

徽州地区の伝統社会では、国からの貞節牌坊の建設、宗族による女祠の建設および文集の編纂により、当時の人々は「良妻賢母式」の女性に対する期待を表した。現在、女祠も牌坊も有名な観光スポットとなっている。村人たちは女祠と牌坊が全村の大切な祖先の遺産であり、観光客を引きつける重要な観光資源だと考えている。女祠と牌坊および祭られる女性たちについて、村人も観光客も尊敬の意を表すが、現在には実行できなく、必要がないと評価する。時代の変化と共に、民衆の価値観が変わり、女性に対する社会的期待も変化している。

Ⅲ 1949年以降の女性に対する社会的期待——「女性は天の半分を支える」

(1) 社会主義農村の建設者と「鉄姑娘」式農村女性

1949年解放後、徽州の農村は「解放されて国家の主人公となる」時代に入る。⁽⁴⁴⁾新しい政権において、村の女性たちは「主人公」の身分が授けられ、社会主義農村の建設者として期待される。

女性たちを家庭から社会へ引き出し、農村の建設者にさせるため、各村では相次いで「婦女連合会」(略称「婦連」)を設立し、本村の女性を組織化し管理した。たとえば、休寧県では1949年末まで、⁽⁴⁵⁾全県263か所の村のうち、221か所の村が「婦女連合会」を設立し、会員は15891人になる。さらに村の「婦女連合会」は、女性のために一連の活動を行った。夜間学校で勉強することを勧め、新婚姻法を宣伝し、男女平等と結婚の自由を提唱した。また、家族の男性を中国人民志願軍に参加させることを勧めさせたり、靴作りで抗美援朝軍に支援も行った⁽⁴⁶⁾りした。これらの活動により、女性の中華人民共和国に対する共感を高めた。さらに、女性たちに国の一員という認識を与え、女性が「主人公」であるという意識を育てた。

竹林村で聞き取り調査した80代の女性YHさんの事例から、国に対する共感を見てみよう。

13才のとき、⁽⁴⁷⁾童養媳に行かせられた。解放以降、毛沢東が童養媳を禁じて、私はもともと童養媳に行きたくなかったので帰らされた。解放前の生活は、口でいえないほど苦しかった。国家が全然私たちを守ってくれなかった。毛沢東のおかげで、よい生活ができるようになった。1950年に村に帰って、村の宣伝チームに参加した。歌ったり、踊ったり、太鼓を敲いたりした。出演しても「工分」(労働量を計算する単位)はもらえないが(参加したかった)。そのとき、本当に毎日気持ちがすっきりした。自分も歌ったり、踊ったりすることが好きで、楽しくて参加できる。村は踊り用の服を準備してはくれないが、私とほかの女の子は、一緒に同じ服を裁縫して作ってもらった。

新婚姻法によって、YHさんは自分の意思により、童養媳の身分を終えて実家に帰った。国に対する感謝を表す一方、彼女は「解放して主人公になる」という気持ちから生活への情熱が喚起され、積極的に村の宣伝活動に参加した。国の法律や政策が、村の女性の身分を変えた。この変化に感激した彼女たちは、より積極的に村の集団活動に参加するようになった。

女性を村の建設に参加するよう導くため、徽州地区の県政府や村委員会は表彰という方法をとった。それは進歩的な女性を宣伝し、女性に対する社会的期待を表すものであった。たとえば、1953年、績溪县上庄村の柯助萍^{かじょへい}さんは、これまで男性の労働であった「役牛耕田」(牛を駆使して田んぼを耕す)⁽⁴⁸⁾の技術を学び、県の「労働模範」と評価され、村の婦人主任に任命された。柯助萍さんに栄誉を授け、政治的地位を与えたのは、村の女性たちが彼女を模範として、農村の建設に参加するよう導くためであった。1955年に、毛沢東は全国の女性に「女性は天の半分を支える」という評価を与えた。この評価により、女性に対する社会的期待は「男性と同様に中華人民共和国を支える」レベルにまで上昇した。各地の政府はさまざまな方法で、多くの女性が農村の建設に参加できるように励ました。

しかし、女性が村の建設に参加する理由は、社会的期待を実現するためではなかった。以下は

1950年代に竹林村の婦人主任を務めたPLさんが、当時の各村人の家で宣伝を行った光景についての証言である。

当時、私は一軒一軒の家を訪ね、女性に村の労働に参加しようと説得した。彼女たちに「旧社会ではわれわれは圧迫されて、苦しかった。今、新中国が成立し、共産党の政策がいいから、女も働けるよ」なんて政治のことばかりいっても、現実的な利益がなければ、誰もついて来ない。だから、私は彼女たちに、「もし労働に来れば、毎月多くの食糧がもらえる。集団労働しない家庭の主婦であれば、毎月食糧は少ないし、「工分」もない。それでは年末に配当金をもらえない。」それを聞くと、多くの女性は働きに行った。

国の女性に対する社会的期待は、農村の建設者になることであった。しかし、村人は政治の視点から国の政策を理解するわけではなく、現実の利益を考慮して社会的期待に対応した。国の社会的期待と村人の求めるものが完全に合致しているわけではないが、両者が交わることで社会的期待は実現できた。

1956年末、国の強力な政策の推進と指導において、全国すべての農村で、農業合作社が設立された。徽州農村の女性は男性と同様に、農業社組織に所属し、農村の労働者になった。1960～70年代に、女性に対する社会的期待は「鉄姑娘」になった。

「鉄姑娘」とは、鉄のような強い意志を持ち、男性に負けないような労働ができる若い娘のことである。1960～70年代に、集団労働が行われた時期における中国の特別なシンボルであった。

1963年、山西省大寨村の郭鳳蓮さんをはじめ、村の22名の若い娘が自発的に洪水災害支援チームに集まり、「鉄姑娘チーム」の最初の形態ができた。1964年に毛沢東が呼びかけた「農業学大寨」(農業は大寨に見習え)⁽⁴⁹⁾のスローガンと共に、大寨村は中国農村の聖地になった。年間200万人に及ぶ各地の農民代表が大寨村に見学を訪れ、「鉄姑娘」は全国に報道され、有名になった。現在、「鉄姑娘」という言葉には、ほぼ男性に負けないほど「一生懸命働く」と「女らしくない、性的魅力がない」というイメージが与えられている。⁽⁵⁰⁾

また「時代は変わった。男と女は皆同じである。男の同志ができることは、女の同志にもできる」とか、「女性は天の半分を支える」⁽⁵¹⁾などの毛沢東語録は「最高の指示」という地位にまで上げられ、広く宣伝、引用された。これらの指示は1960～70年代の「男女平等における最高の道理となったわけである」⁽⁵²⁾。中国の各地では、サービス業、紡織業、農業だけではなく、建築、製錬、機械、運搬など力仕事が多い「男性の業界」に女性が入り、「鉄姑娘」式の若い娘が登場し、「鉄姑娘」チームが結成された。農村では、「女はまぐわを持ってない」、「女が壁を接げば人畜が栄えず、女が梁に触れれば人が病み、畜が死ぬ」などという頑固な文化タブーと規範が破られた。⁽⁵³⁾

徽州地区の、太平県甘棠大隊(現黄山区甘棠鎮甘棠社区)⁽⁵⁴⁾に「鉄姑娘チーム」がある。リーダーであるF・HZさんは「赤脚医者」になり、村人を診察した。歙県大梅口村に、大梅口ダムを建設するため、村の3人の娘が「鉄姑娘爆破チーム」を結成し、人力で毎日八つの穴を爆破した。メンバーのF・XRさんは膝に負傷しても、工事現場で仕事を続けた。『徽州日報』は彼女たちの事績を「鉄姑娘

放砲隊 意如鉄 膝如鋼」(「鉄姑娘爆破チーム」の意志は鉄のごとき、膝が鋼のごとく)と報道した。

農村では、男性が毎日「工分」満点10点をもらい、女性は満点8点をもらった。^{きんいっこう}金一虹が行ったインタビューによると以下のようなことがあったという。「鉄姑娘」は男性と同様に仕事をしたが、同じ「工分」を受け取れなかった。しかし、そのことを気にせず、「無私に貢献する」と解釈したという現象があった。⁽⁵⁵⁾農業や茶業が主流である徽州地方では、男女問わず田んぼ、および茶畑で農作業をした。徽州地区の農村では、男性10点、女性8点の「工分」計算制度があったが、男性より仕事ができる女性は、奨励として男性と同様に10点とることができた。しかし、それは極めて稀なことであった。休寧県梓源村は、1974年「農業は大寨に学べ」のときに、全村の人力を尽くし、棚田を造った。遠くの間から大きい石を持ち運び、小さく砕き、その石で棚田を積み重ねた(写真7)。

村人のYさんは当時の仕事を思い出して、「うちの嫁がすごかった。(棚田を造ったため)山の下から上に石を担って運び、1日で男の私より多く運んだ。だから工分10点をもらった。うちの生産大隊では工分1点が5分(人民元0.05元)だ」と語ってくれた。当時、ほかの収入源がなかった普通の農家にとって、工分の奨励は最も得になる褒賞であった。それらのことを通じて、村団体は女性の労働能力と個人の価値を認めるようになった。

また当時、村で仕事が一番できる女性は村の婦人主任を担った。これは農村の女性が村の権力集団に入る唯一の方法である。前に述べたF・HZさんは、医学を勉強し、正式に村の衛生員になり、村人および隣村の人々まで診察した。さらに、村の婦人主任となり、「計画生育」の仕事をした。その後、F・HZさんは共産党に入り、村の共産党支部委員になった。優れた仕事能力を持ち、村人に貢献する

ことにより、F・HZさんは^{こうざん}「黄山^{じゅうだいけっしつじょせい}十大傑出女性」として表彰された。1970年代に「考えが進歩的」な村の女性たちは、積極的に共産党に入党の申請をし、あるいは「先進工作者」に申請した。農村の女性は仕事の能力により、個人の価値が認められ、さらに政治に参加でき、管理層に入ることも可能であった。

「鉄姑娘」式の女性は、集団労働の時期における政治に深く関わる産物であった。大隊や村集団で一定の役割を果たした農村の女性たちは表彰された。1978年から家族営農請負制の実施により、農家が一定数量の農作物を村(国家)に上納し、それ以外の余った農作物は農民で自由に処分できるよう



写真7 梓源村の棚田(右下が「梓源村委員会」wechat 公衆号より、ほかは筆者撮影)

になった。それゆえ、仕事ができる女性の活動は大隊や村より、自分の家庭経済へと向いていった。また2006年から農業税金が免除され、農村における村団体の経済は、村人の個人活動との関連性を薄めていった。もともと集団の利益に役に立つとされた「鉄姑娘」式の女性たちは徐々に忘れられるようになった。

「鉄姑娘」の特徴は、男性に負けないほどの労働をしたことである。いわゆる毛沢東が提唱した「男女都一样」(男と女は皆同じである)である。当時の人々は簡単に「男女都一样」を男女平等と同一化した。その「鉄姑娘」式の女性について、竹林村の程書記の話が意味深い。「当時その女性たちは本当に苦勞した。体を壊すほど。しかし、今われわれはあまりその話をしない。なぜならば、村は彼女たちに何も与えていないから。過去のことがそのままに過ぎ去ってしまった」と述べている。この言葉から、当時の女性たちの努力は認めるが、性差を無視して女性に男性と同様の仕事をさせることには反対の態度を持っていると思われる。しかし、程書記のように個人の立場では体を壊すほど貢献した女性に敬意を持ち、その一方で役人側は彼女たちを忘れようという曖昧な態度をとっているのは、竹林村だけではない。現在まで彼女たちは政府から与えられた補償などは当然なく、公式的にも言及されない状態であり、まさに国家の「主流もその記憶を薄れさせよう」としている⁽⁵⁶⁾のである。

「鉄姑娘」時代の生活を回顧して、「鉄姑娘」であった女性は生活条件の苦しさを嘆く。しかし、感情的な思い出も多く、当時あまり苦しくなかったと評価する人々もいる。歙県蜈蚣嶺村の「鉄姑娘突撃チーム」のリーダーF・DYさんは、当時すべての村人に割り当てられた仕事をし、仕事を怠ける者は批判され、少ない工分しかもらえなかったといった。F・DYさんは鉄姑娘として、毎日力を尽くして茶園を作ったり、茶の葉を摘んだりして、村で最高の工分9点をもらった。(当時の蜈蚣嶺村大隊では、10点を授けることはあまりなかった)。すべての村人が貧乏であった環境と、みんなが統一して仕事が配られた村集団において、F・DYさんは、村のほかの女性の労働量と比較すれば、高い報酬をもらえることが公平だと認めた。

黄山区甘棠村の「鉄姑娘チーム」リーダーであったF・HZさんは、現在もメンバーたちと一緒に残業してダムを建設したことを懐かしんでいる。当時の人々の考えが純粋で、ひたすら力を尽くして労働し、集団に貢献する人が評価されるとF・HZさんは1970年代の世間の評判を思い出した。この思想に深く影響されたF・HZさんや、F・DYさんは現在の村人が怠けて、利益を重視し過ぎることについて何度も批判した。

これらの女性たちが「鉄姑娘チーム」に入り、リーダー、村婦女幹部、共産党の黨員になれたのは、優れた仕事能力だけでなく、集団、国家に貢献する思想を持っていたからである。彼女たちは自分の「鉄姑娘」としての経験や当時の仕事などについて、かなり肯定的に捉えている。

F・HZさんは現在、地域の医者であり、クリニックを営んでいる。彼女のチームメンバーは、全県ではトップクラスのホテルを経営したり、孫を世話し、のんびりと暮らしたりしている。彼女たちは、かなり豊かな生活を送っているのである。F・HZさんは「鉄姑娘チーム」のときに磨いた強い意志が、メンバーたちを支え、よい生活のために頑張る原動力であると考えている。しかし、黄山区の元婦連主任Y・JXさんによると、F・HZさんの兄は1970年代に村の大隊長を務め、彼女の家族は村の中で地位が高いため、仕事や出世、クリニックの経営などができたのだというのである。上述したようなよい生活を送ったメンバーたちは、多少なりとも人脈や資金などの資源を持っていた人たちである。

高い社会的地位、有効な人脈と資源は彼女たちが成功した客観的条件となっている。

村には「鉄姑娘」の経験に不満を持っている女性もいる。梓源村で聞き取り調査をした際、現婦人主任の隣家の庭に、顔色のよくないお婆さん CJ さんが座り込んでいた。彼女は 1970 年代後半に、村の婦人主任を務めていた。毎日きつい農作業と一人っ子政策の実施で忙しかったことにより体を壊し、早くに仕事や家事ができなくなった。CJ さんは現在何も補償をもらえず、養老保険も普通の村人と同様に低い。彼女も同村の村人も当時仕事で体を壊して実際の利益がないのは引き合わないと考えていた。CJ さんは当時「工分」の満点 8 点しかももらえなかった。女性が男性より「工分」が低い原因を、彼女はただ「上がそう決めた」といった。自分の利益に関わる「工分」の計算制度について、CJ さんは異議を出さず、当たり前のことだと考えた。金一虹が述べたように、「鉄姑娘」が表した「男女都一样」は左傾した政治的な呼びかけであり、女性を男性のように貢献させたが、平等の権利は無視された。女性は農村集団の労働にてできる限り義務を尽くしたが、自分の権利を守る意識がなかった。⁽⁵⁷⁾ F・HZ さんは村委員会に勤務していたときに、そのような不満を持っている女性に会ったこともあった。彼女たちは交通の不便なところに住み、仕事で体を壊し、家事も出稼ぎもできない女性であると、F・HZ さんはまとめた。特に社会の貧富の差が大きくなっている現在、まわりにいるよい生活を送る家と比較すれば、彼女たちの不満はより大きくなる。

「鉄姑娘」であった一部の農村の女性たちは、こうした経験に対して、誇りと懐かしさを持っている。単に集団への貢献という思想だけではなく、彼女たちの労働能力と個人の価値が村集団に認められたということである。しかし、彼女たちは当時、男性のように貢献しできる限りの義務を尽くしたにもかかわらず、自分たちの平等の権利が無視されたことに現在もなお気づいていない。当時、「鉄姑娘」の権利は守られなかった上に、後に、過度の労働で病気になったことに何の補償もなく、周囲の人たちとの貧富の差も大きいという現状がある。実際の利益（身体、収入、養老保険など）が保たれていない状態に対して、彼女たちは不満を感じているのだろう。

(2) 商品経済における女性に対する社会的期待

1978 年以降、中国では経済建設を中心とする政策の実施を始めた。経済発展の策略は鄧小平の「先富論」：先富帶動後富、最終實現共同富裕である。⁽⁵⁸⁾ 「先富帶動後富」というのは、先に豊かになる人は経済的なリーダーを務め、村人を率いて裕福になる。全社会が経済の発展を強調する背景において、村の女性も例外なく、経済的なリーダーと期待されている。

徽州地区の農村では、そのような社会的期待を持っていた女性は 2 種類に分けられる。一つは農村の女性村管理者であり、彼女たちは村人を率いて収入を増加させ、村経済の発展を実現することに役に立つと期待される。たとえば、^{しょうれんきょう} 歙県 紹瀛郷 和平村の H・CL さんである。

歙県紹瀛郷和平村の H・CL さんは村の荒れた山を請け負い、造林して緑化し、全国、安徽省の労働模範に授けられ、全国「婦連」から「三八綠色獎章」、安徽省「婦連」から「三八紅旗手」⁽⁵⁹⁾ が授与された。以下に H・CL さんの聞き取りにより、彼女が村に対する貢献を要約する。

H・CL さんは 1987 年に村の婦人代表になった。1990 年に安徽省が「5 年間で荒れた山を消せ」という目標を決定したため、紹瀛郷の役人が各村人の家まで行って造林の役

割や、国が提供した造林の優待を宣伝した。しかし、村人にとって造林のことは初耳であり、村人たちは躊躇していた。村の婦人代表であり、共産党員である、H・CLさんは村の荒れた山を改造するため、率先して「^{こけいこう}虎形坑を緑化する契約」に署名し、16人の女性の村人を説得し、彼女たちを率いて45畝の山地に2万本の杉の苗を植えた。それにより「和平村三八造林場」が造られ、H・CLさんがリーダーに選ばれた。

成功したH・CLさんは1991年に村の北部の荒れた山135畝を引き受け、山地を小さく分けて村人たちに請け負わせた。また参加した村人たちに土地の整理、苗の植え方を詳しく指導した。銀行の融資金はまだもらえなかったが、村人たちに給料を出すため、息子の結婚に準備した貯金を流用したこともある。1995年に茶葉市場が弱気相場になり、村の茶園300畝と製茶工場が閉まる状態になる。H・CLさんは村人の何人かを率い、茶園を請け負った。経済的な利益を上げるため、H・CLさんは借金し、茶園で間作を行い、新しい製茶機械を投資し、製茶工場は赤字から黒字に転じた。

H・CLさんは、まわりの人にやめるようにいわれる状況で、荒れた山を請け負った。その動機は「私が村の婦人代表と共産党員」であることにあった。個人の損得を計算せずに集団に貢献する、という考え方と責任感は計画経済時期を経験した人々の特徴として残されている。1980、90年代に表彰された女性には「集団のために貢献する」という動機が強く表れている。

しかし、H・CLさんの後期の目標は変わった。市場の変化に従い、村の造林場と茶園の農業構造を調整し、山林の資源を最大限に活用し、村人の収入を増加させることを目標とした。商品経済の発展により、経済的利益を追い求めるのが主流になっている。経済的な利益を強調する社会では、農村の女性に対する表彰は、個人の責任感やほかの人に与える精神的な励ましより、女性が村および村人にもたらす経済的な貢献が重視されるようになった。

H・CLさんは、村人たちを率いて裕福になることにより、経済的なリーダーとなり、国から「三八紅旗手」を授けられた。これは女性に対する表彰の最高の榮譽である。H・CLさんの業績から見れば、村の管理者に属する婦人幹部という身分は、彼女が村の女性を率いて村を経済発展させ、村人の生活を豊かにするという目標の実現に役立ったことがわかる。H・CLさんのような経済的なリーダーに対する期待は、実は女性の村管理者に対する期待である。そのような女性管理者は、村経済の発展および村の女性たちの家庭内地位を上げることに於いて、率先して手本を示す作用を発揮できるように望まれている。政府の視点から見れば、H・CLさんのような女性が多く出て、村の経済を発展させ、女性の収入を増加させ、家族における女性の地位が上昇することを期待している。

二つ目は村に工場を建てる女性の企業家に対する期待である。女性の企業家は「先に豊かになる人」といえる。彼女たちが建てた工場により、まわりの女性の就職を助け、収入を増加させられると期待されている。その典型的な人物はY・QHさんである。以下にY・QHさんから聞いた服装工場を造った話を要約する。

休寧県^{チャーコウ} 汧口村に、Y・QHさんの服装工場がある。Y・QHさんは以前、杭州の服装工場に出稼ぎに行っていた。彼女は家族と離れたくないため、2008年に故郷に服装工場を

造り、事業を始めた。休寧県は町である屯溪に近いので、多くの村人は屯溪で、より給料が高いところへ就職した。そのため、工場を始めたころは、工人を招くのが難しい状況であった。Y・QHさんは汊口村で子供や親を世話するため家にいる女性を工場へ働きに来るようにと説得し、裁縫に未経験の女性を無料で育成した。服装工場は徐々に広げられ、2014年に年産値は200万元(約3400万円)以上に達し、従業員は55人となった。そのうちの女性の多くは村の留守女性である。

Y・QHさんは、今までの成果の中で、一番の自慢は、村に家で「留守女性」の収入を増加させたことだと述べた。村の「能人」(農村の経済的なリーダー)たちは、「農民的生活世界に住み続けており、地域の生活にシンパシーを抱いている」⁽⁶¹⁾ため、個人の利益を最大化するのみならず、地域の村人の利益も守る。それゆえ、村人にとってこのような工場は、鋭い対立関係もなく、生活の助力として、さらに「庇護者に近い」⁽⁶²⁾存在である。

Y・QHさんは服装工場の経営により生活が豊かになった。当地の税収に大きな役割を果たす一方、工場が近所の村人の仕事先として提供されたため、^{きゅうねいけんのうそんち ふたいとうじん}「休寧県農村致富带头人」(休寧県農村の経済的なリーダー)として表彰され、県婦人代表に選ばれた。Y・QHさんのような村の「能人」は生産活動において、政府から支援を受け取り、地元の資源を生かしている。さらに、自分に利益をもたらすことだけでなく、地域に公的な利益をもたらすことも考えられる。彼女の事例から見れば、創業によって村に残る女性の就職問題を解決するのは、村の経済を発展させる可能性が高い方法であり、「先富論」の策略に一致している。それゆえ、女性の企業家に対する期待は、現在の社会の経済発展において主流の思想に合致する。村にいる女性の経済的なリーダーや企業家はまわりの女性を率い、家を興し、富を築き、彼女たちの経済収入を上げることを通して、村の女性たちの家庭・社会的地位を上昇させる。村において女性の経済的なリーダーに対する評価は高い。

(3) 「良妻賢母式」の女性に対する再期待

改革開放以降、階級闘争を主流にして政治階層だけで他人を評価するイデオロギーや、仕事や審美において女性の性別を曖昧にする「脱女性化」意識が批判されてきた。また、家庭における女性の役割が再重視され、「良妻賢母式」の女性が再び呼びかけられている。

現在の「良妻賢母式の女性」に対する社会的期待は、「十星級文明戸」として表彰されている。

「精神文明建設指導委員会」と「婦連」が行った「十星級文明戸」の表彰は、農村の家庭に対する要求がどのようなものなのかを表している。その十星とは「道德」、「守法」、「義務」、「致富」、「計生」、「科技」、「新風」、「文教」、「団結」、「環境」である。道德と法律を守り、社会義務を尽くし、生活水準を上昇させるため勤勉に労働し、一人っ子政策を守り、科学を信じて勉強し、よい家族関係を作り、知識を学び、迷信に反対し、村人とよい人間関係を作り、家と村の環境を守るという10のポイントで村人を評定する。「十星級文明戸」となった家庭には表彰メダルが授与され、メダルは家の正門の上に掛けられる。村人の話によると、十星をすべてとることは難しいことで、多くの家庭では7~9星がとれる程度であるという。「十星級文明戸」に達するのは簡単なことではない。

注目するのは、「十星級文明戸」を主催する一つが女性の權益を代表する「婦連」であることである。

項目	评选要求与标准	自评	互评	评定
道德观	热爱祖国，诚实守信，尊老爱幼，邻里和睦；无赌博、虐待老人、妇女、儿童行为。	✓	✓	
守法观	积极参与普法活动，自觉学习法律法规，模范遵纪守法，家庭或村中无违法乱纪问题；带头抵制非法组织和邪教活动，不信谣传谣；遇事讲理，不耍横撒野，不无理取闹，不无理上访。	✓	✓	
义务观	积极参加家庭教育；积极参加守岗护边工、义务工，积极参加社会公益活动；积极参加法律援助。	✓	✓	
致富观	积极参加技能培训教育，家庭成员均不低于本村人均收入，家庭总收入逐年提高。	✓	✓	
计生观	遵守计划生育法律法规，计划生育，优生优育；无早婚、早育、未婚先孕、堕胎。	✓	✓	
科技观	热爱科学，不断增强科技意识，参加科技培训，以科普刊物杂志、智力掌握1-2门实用技术；积极参加产业结构调整，不断提高农村科技致富的素质。	✓	✓	
新风观	树立良好的家风，家庭成员文明礼貌，无不孝不，勤俭持家，移风易俗，厚养薄葬；崇尚科学，反对迷信，支持殡葬改革；不参加“迷信”等邪教及非法组织活动。	✓	✓	
文教观	尊重知识，尊师重教，支持教育事业，自觉履行抚养义务；积极参加村里的家庭文化培训，参与社会文体活动，提高素质。	✓	✓	
团结观	家庭和睦，邻里和睦；助人为乐，见义勇为；无打架、斗殴、骂人行为。	✓	✓	
环境观	坚持开展垃圾分类，保持家庭及住所周边环境整洁卫生，不乱堆乱倒，乱搭乱建，乱扔乱倒；自觉参与绿化美化，居住环境优美；积极参加爱国卫生运动，家庭及个人卫生，健康狀況良好，自觉维护公共环境卫生。	✓	✓	

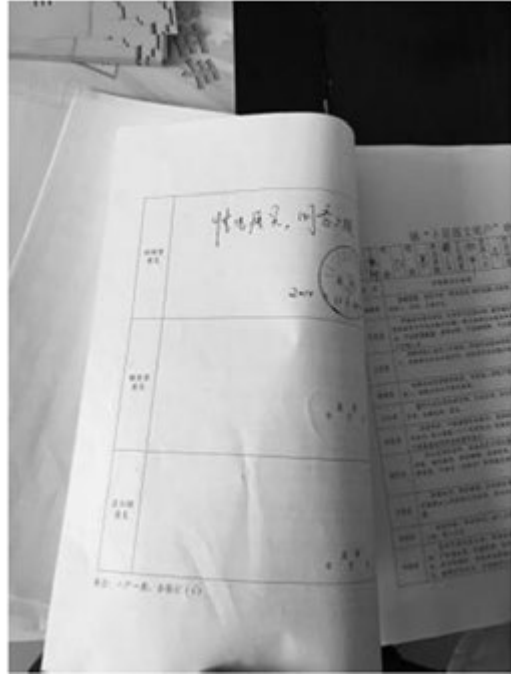


写真8 「十星文明戸」に関する書類（筆者撮影）

元黄山市副「婦連」主席L・WLさんは、「〈十星級文明戸〉は家庭に対する表彰だが、妻である女性がそこで重要な地位を占めている。上の親に孝行し、下の子供を育て、また近隣との関係や家計の切り盛りは、ほぼ妻が担っている。村人たちは、家族の仲がよいかどうかは妻が肝心だと考えている」と述べている。竹林村で調査した際に、40代の男性、Cさんは隣家の妻について、「家族の仲が悪い。夫婦二人はギャンブル好き。妻は夫を待たずに先にご飯を食べる。食べ終わったら、すぐ麻雀ギャンブルをしに遊びに行く。みっともない家だ。こんな妻がいるからね」と述べた。夫婦関係を基にする「生活家庭」が実際に広く存在していると人々は感じている。現在、夫婦関係の良し悪しが家族の関係に直接に影響していると認められている。妻は黙って家族に貢献するのではなく、彼女たちの言葉と行動が家族に大きな影響を与える。伝統的な「良妻賢母式」の女性に比べ、現在の妻は家族における地位が高い。

経済発展を強調する現在の社会では、このような表彰が村人の生活に対してどのような現実的な役割を果たすのだろうか。このことについて、L・WLさんは「もちろんあるよ。たとえばお見合いするとき、相手が十星級文明戸だったら、女性側は向こうが道理のよくわかった家庭で、将来の姑嫁の間に問題は起きず、安心できそうだと考える可能性が高い」という。しかし、この表彰は精神的な面での励みであるが、人々の現実の利益とは合致していないので、村人たちの積極性を引き出せない。このような社会的期待の実現は明白ではない。

「十星級文明戸」の表彰はその家庭に対し、政府が承認を与えたと見なされ、一定の権威性を持つ。労働により女性の個人価値が認められる現在では、家庭、村内における妻としての女性の地位は、村人および政府によって承認される。

再期待される良妻賢母式の女性の意味は多元化している。単に家族に対する貢献だけではない。女性は法律と道徳を守ることを基準に、生活の水準を上昇させるため労働する。さらに科学的な思想観念を持ち、他人の家族や、村とよい関係を保つなど、品行、労働、思想、社会関係など全面的な要求

が表されている。伝統的な良妻賢母式の女性より、現在の女性はより大きな役割を果たし、機能を発揮する範囲が広い。女性の、家族および村内における影響力と地位は、著しく上がっている。

政府が選んだ「十星級文明戸」のほか、黄山市では、市、区、郷が「^{こうざんこうじん}黄山好人」（黄山市のよい人）、「^{さいびとんけいじん}最美屯溪人」（最もきれいな屯溪区の人）、「^{ようこうせい}陽光之星」（輝いて、優れた人）などさまざまな表彰活動が行われている。これらの表彰は、市、区、郷の政府が最初に推薦し、ネットの投票により定められる。その中には「^{こうせきふ}好媳婦」（よい嫁）、「^{こうとくせい}孝徳之星」など親孝行に優れた女性に対する栄誉が多い。以下にS・XQさんが「孝徳之星」と表彰された事情を要約する。

休寧県源芳郷梓源村のS・XQさんは2014年度源芳郷「孝徳之星」に選ばれた。S・XQさんはもともと夫と一緒に「源芳郷一屯溪」の往復バスを経営し、切符を売っていた。4年前から姑が脳出血で半身不随になった（2016年7月に姑は亡くなった）。S・XQさんは仕事をやめて家で留守番をして姑の世話をした。毎日、姑を風呂に入れ、ご飯を作り、食べさせ、おむつを取り替え、車椅子で散歩に連れていったりする生活を4年間、続けた。S・XQさんはネット投票で最高位の「孝徳之星」が授けられた。

S・XQさんはバスの切符売りの仕事をやめ、姑を世話するために自発的に家に帰った。これは伝統社会における舅姑の世話とは明らかに異なる。経済力の不足や伝統的な養老観念が強かったことから、農村では国家養老を全面的に実施できない。一人っ子政策により養老資源が不足する現代農村の実情に直面した国家は、「家庭養老」を提唱した。そこでは養老における、女性の役割の重要性が強調された。嫁が担う養老の役割は国家養老制度の不足を補い、社会の基である家庭の安定を守り、社会の安定に役割を果たす。

「文明戸」と「好媳婦」の表彰から見れば、女性は家族および村社会の中でよい関係を築き、老人扶養問題の解決に主要な役割を果たす「良妻賢母式」の現象が現れる。しかし、現在の「良妻賢母」は伝統的なものと比較すれば、明白に区別される。伝統的な「良妻賢母」は受け身の立場で家族を中心に貢献するが、現在の方は家族だけではなく、村社会とのよい関係を保つ。彼女たちは役割を果たす範囲が広がっている。また彼女たちは能力や、教育程度など総合的に見れば、伝統的な「良妻賢母」より遥かに高い。

おわりに

女性に対する社会的期待には、その当時の人の女性の地位に関する考えが反映されている。

清代、中華民国時代において、社会は徽州社会の女性に対し、貞節牌坊、女祠の建設と文集の刊行による「良妻賢母式」の女性になることを期待した。このような社会的期待の背景にあるのは、長期間、家を離れ商売する徽州商人にとって、家族の世話をし、暮らし向きを管理するという現実の生活から求められたものであった。また各時期の政府の村社会を統治するための政治的な要求、および文人たちの儒家倫理を基にした要求があった。そして、1949年以降は、女性に対する社会的期待の段階的な変化が現れる。1950～60年代には、女性は村の建設者として期待された。1970年代からは徐々

に「鉄姑娘」に変わっていく。「女性は天の半分を支える」時代には、女性に対する評価と表彰は著しく上昇した。しかし、「鉄姑娘」式の「男女平等」は真の平等ではなく、伝統的な性別分業に対して挑戦することはなかった。女性は経済活動に参加したが、男性と同じ平等な地位を得ることはなかった。1978年改革開放以降、女性に対する社会的期待は主に、経済発展を中心とする女性の経済的なリーダー、および精神文明を中心とする「文明戸」と「好媳婦」になる。村経済の発展には女性の参加が不可欠であり、仲がよい家族、安定した社会もまた女性の関わりに大きく影響を与えた。女性が家族と社会に果たす役割は重要になり、それによって女性の社会的地位は大きく上昇したことが明らかになった。

中国の家庭では、「^{だんしゅがい} 男主外、^{じょしゅない} 女主内」（男性は外の仕事をするが、女性は家の仕事をする）という社会的分業が何千年も続けられている。この性別によって行われる社会的分業は厳しく、互いにこれを侵さない。よく男女の社会的な尊卑を表すとされる。⁽⁶⁴⁾ 男性の方はこの社会的分業により、社会的価値が高いように見える文化、公共的領域で認められやすい。⁽⁶⁵⁾ 女性が高い社会評価をもらうためには、この男性利益向けのシステムを順守するしかない。徽州において、貞節牌坊、女祠は女性を褒めるという意味があるが、男性の需要によって建てられたものである。当時の女性には「良妻賢母式」の女性になるという期待が与えられた。女性は受け身の立場でこれに従い、夫の家族に貢献せざるを得なかった。本意が問われることはなく、人生の選択の自由がなかった女性たちは、男性から厳しく差別され、「暗闇の世界」の中で抑圧されていた。

1949年以降、上位である国から下位の各村に至るまで行われた社会主義改革は「男主外、女主内」の固い社会的分業を打ち破った。「女性は天の半分を支える」という政治的なスローガンが、中国の女性解放の象徴として唱えられた。そうした状況の下、徽州の女性労働は、自分の家庭を中心とする個人労働から、全村範囲でほかの村人と一緒に協力しあう集団労働まで広がり、全面的に社会的労働に進出していった。一部の女性は優れた仕事能力と共産党に対する忠心により、村において政治地位を獲得し、自分の人生を把握し、変わることができるようになった。しかし、この時期における社会主義農村の建設者や「鉄姑娘」は国が生産活動の期待に応じて出現させたものであり、女性が自発的に求めているものではなかった。こうした建前の男女平等は、実は国の発展のために女性の「女性性」⁽⁶⁶⁾を犠牲にしたにすぎなかった。

改革開放以降、徽州農村の女性の活動空間は村範囲を突破し、さらに県、国にも広がっている。村委員会において女性の役人が登場したり、女性の経済的なリーダーが現れたりしている。彼女たちは村において、自分の理想を実現させ、さらに経済的な利益のため、社会的期待に相応した行為をしているのである。また多様な生活が選べる中で、自ら夫の親を世話すると決意した「好媳婦」の事例もある。性別による社会的分業がより一歩打破され、彼女たちは能動的に選択する意識が強くなっている。女性に対する社会的評価は多分野において、多元化する勢いで発展しているといえるだろう。

注

- (1) 黄河中流・下流の地域であり、漢民族の文化発祥地とみなされる。
- (2) 儒教が唱えた道徳である。「三綱」は君臣・父子・夫婦の道であり、「五常」は人の常に守るべき五つの道徳で、仁・義・礼・智・信をさす。
- (3) 唐力行『徽州宗族社会』安徽人民出版社、2005年、p.7。
- (4) 鄒魯は孔子の故郷であり、儒学も鄒魯学と呼ばれる。
- (5) 馮劍輝『近代徽商研究』合肥工業大学出版社、2009年、p.37。
- (6) 「商多徽歙及山陝之寓籍淮揚者」。北京図書館古籍出版編集組『[万曆]揚州府志』書目文獻出版社、卷十一 七。
- (7) 同注(5)、p.41。
- (8) 許承堯『歙事閑談』黄山書社、2001年、p.601。
- (9) 春聯とは中国で旧正月に、めでたい詩文を書いた赤い色の紙であり、よく門の両側に張り付ける。
- (10) 詳しくは馬路「徽州地区の女祠に関する一考察——女祠の祭祀、分類及び機能について——」『歴史民俗資料科学研究』22 神奈川大学歴史民俗資料科学研究科編、2017年、を参照していただきたい。
- (11) データ典拠：麻勤「中国牌坊文化遺跡空間分布特征与旅游資源価値評価」2015年、p.21；趙媛、麻勤、郝麗莎「中国現存牌坊文化遺跡の地域分異及成因」『地理研究』2016年、p.1956；羅剛『千古悲歡閱滄桑 徽州古牌坊』遼寧人民出版社、2002年、p.213。
- (12) 「貞節」とは、未婚あるいは婚約中の男性が亡くなった場合に貞節を守る女性に対する表彰である。「節孝」とは、夫が亡くなっても再婚しない、夫の家族に一生を貢献する女性に対する表彰である。「節烈」とは貞節を守るため命をかけて、殉死という激しい行為をした女性に対する表彰である。民間では以上の女性を同一視することが多かった。本論では説明しやすくするため、特に明記がない場合には、以上の女性を「貞孝節烈婦」と総称する。
- (13) 清代以降、殉死という行為はあまり奨励されなくなったので、牌坊の中の「節烈牌坊」は少なかった。
- (14) 徽州では、一般的に、女性に関わるすべての牌坊を「孝節牌坊」ではなく、「貞節牌坊」と呼んでいる。そのため、本文ではそれを基準として、牌坊を総称する時には「貞節牌坊」という用語を使用する。
- (15) 王伝満「明清徽州節烈婦女的牌坊旌表」『文山学院学報』文山学院学報編輯部、2010年、p.45。
- (16) 東南大学建築系、歙県文物事業管理局『徽州古建築叢書——棠樾』東南大学出版社、1999年、p.29。
- (17) 崑岡等(修)『欽定大清會典事例』『続修四庫全書』上海古籍出版社、1995年、史部第八〇四冊・卷四〇三 p.394。
- (18) 黄曼「从女性墓碑文看晚明節烈的表彰」『浙江海洋学院学報』浙江海洋学院学報編輯部、2012年、p.41。
- (19) 徽州区はもともと歙県の一部であり、1988年に歙県の西部地区が単独の区に分けられるが、ここでは徽州区を歙県の地域として共に紹介する。
- (20) 同注(16)、p.55。
- (21) 毕忠松、李芸璋、梁燕楓「徽州古祠堂羅東舒祠建築特色浅析」『瀋陽建築大学学报(社会科学版)』2014年、p.346。
- (22) 程颢『二程集』中華書局、1981年、第三冊卷第十八 p.187。
- (23) 黄景瑄「新建享妣專祠記略」『潭渡孝里黄氏族譜』清雍正九(1732)年、卷六 p.34。
- (24) 歙県呈坎前羅氏宗族「貞靖羅東舒先生祠」に『新祠八則』(板の看板)があり、一番目の『妥神靈』に上記の文章が記録されている。趙華富「徽州宗族对朱熹『家礼』的繼承与变革」『安徽大学学报(哲学社会科学版)』安徽大学学报編輯部、2016年(1)、p.98。
- (25) 洪泰川「王充東源洪氏六派祠記」『歙西王充東源洪氏宗譜』乾隆丙子(1736)年、卷十 p.1。
- (26) 「妻」と「妾」は日本語と中国語では漢字が同じだが、意味が異なる。
- (27) 胡潔「古代日本の婚姻形態に関する一考察——中日両国における妻妾の呼称の相違を通じて」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』1996年、p.66。

- (28) 官位の名称である。品は官等であり、九品に分けられ、一品が最高級である。
- (29) 政府が正式に認めた兩淮製塩場の商人の頭である。
- (30) 朱益新（編）『歙県志』中華書局、1995年、p.680。
- (31) 江蘇古籍出版社『中国地方志集成 安徽府県誌輯 51 民国歙県志』1998年、p.733。
- (32) 同注(23)。
- (33) 張海鵬『明清徽商資料選編』安徽人民出版社、1985年、p.42。
- (34) 王伝満「明清徽州知識精英対節烈婦女事跡的張揚」『湖南第一師範学院学报』2009年、p.115。
- (35) 例えば、『徽州府志』（明・弘治版）には、結果を問わず、貞節表彰の立候補になった女性の名が載っている。また、『徽州府志』（清・康熙版）には、中央政府の表彰に達しないが、地方の民衆と役人に認められた女性が付録に載せられている。明代と清代では女性の貞節が重視されたため、徽州の地方志でも『烈女伝』の幅が広がった。『シャ県誌』（中華民国）は16冊あるが、その中の4冊が『烈女伝』である。
- (36) 楼文釗「楼文釗序」同注(31)、序p.3。
- (37) 扁額：門戸や室内などにかける横に長い額である。対聯：対句を書いた掛け軸である。
- (38) 同注(31)、卷二・秩祀p.3、5；
江蘇古籍出版社『中国地方志集成 安徽府県誌輯 48 道光徽州府志』1998年、營建志・壇廟p.10、14、19；
卷二・祭祀 p.5。
- (39) 同注(31)、卷二・秩祀p.5。
- (40) 趙吉士『徽州府志』康熙三十八（1699）年、卷十六・列女p.18。
- (41) 同上、卷十六・列女p.17。
- (42) 汪洪度「婺源施氏特建貞孝姑祠堂記」『新安女史徵』乾隆壬辰（1772）年、p.9。
- (43) 王伝満「徽州女祠与節烈婦女」『阿坝師範高等専科学学校学报』2008年、p.23。
- (44) 中共上庄村党支部、上庄村委員会『上庄村誌』内刊2009年、p.13。
- (45) 休寧県地方志編纂委員会辦公室『休寧県誌』黄山書社、2012年、p.776。
- (46) 同注(44)、p.122。
- (47) 幼女をもらって育て、年ごろになって自分の息子の配偶者とする旧中国の風習である。
- (48) 同注(44)、pp.123-124。
- (49) 大寨村はもともと平地が極めて少なく、貧しい山村であったが、村人たちが山地を切り開いて農地の改造を行い、急速な生産力の成長と社会改造を成し遂げた。1963年その成果が認められ、毛沢東が全国に「農業は大寨に見習え」と呼びかけたため、模範農村として一躍有名になった。その後、全国で「大寨式」の農業が推し進められた。しかし大寨村の開発は、自然を無視して山地の耕地化を進めたもので、1980年代に批判され、模範も取り消された。
- (50) 金一虹『女性叙事与記憶』九州出版社、2007年、pp.55-56。
- (51) 毛沢東が「女性は天の半分を支える」と発言したかどうかについて、正確な考証ができないが（耿化敏2007）、世間はそれを毛沢東の発言と黙認し、よく引用される。
- (52) 金一虹「『鉄姑娘』再思考——中国文化大革命期間的社会性別与労働」『社会学研究』2006年、p.180。
- (53) 同上、p.189。
- (54) 農村の農民公社で、農業に従事しながら医療衛生活動を行った半農半医の衛生員である。
- (55) 同注(52)、p.193。
- (56) 同注(50)、p.158。
- (57) 同注(52)、p.193。
- (58) 鄧小平『鄧小平文選』第2巻 人民出版社、1994年、p.152。
- (59) 1978年第4次全国人民代表大会では、仕事における婦人の特殊性を無視することの誤りが強調され、「婦連」が再び活動を始めた。「婦連」とは、婦女連合会の略称であり、中国の女性と児童の利益を代表し、守る組織で

ある。「婦連」組織の構造は上から下に、全国（全国婦連）、地方（省、市、区の婦連）、基層（郷鎮婦連と農村婦女代表会、街道婦連と社区婦連）となっている。文化大革命の時期には一時、組織は壊滅状態となり、約11年間にわたって活動を中断した。「婦連」は1979年から毎年、「三八紅旗手」と「文明巾幗崗」^{ぶんめいきんてくこう}を授与し、社会に大きく貢献した女性、仕事に優れた女性および女性団体を表彰した。

- (60) 中国語の「留守女性」は夫が出稼ぎなどで長期間不在のため、子供や親を世話し、シングル生活を強いられている女性たちである。
- (61) 田原史起「農業産業化と農村リーダー——農村專業合作社成立の社会的文脈」『中国農村改革と農業産業化』日本貿易振興機構アジア経済研究所、2009年、p.235。
- (62) 同上、p.236。
- (63) 李霞『娘家与婆家——華北農村婦女的生活空間和後台權力』社会科学文献出版社、2010年、p.11。
- (64) 費孝通『郷土中国生育制度』北京大学出版社、1998年、p.122。
- (65) 蘇紅『多重視角下的社会性別觀』上海大学出版社、2008年、p.128。
- (66) 関西中国女性史研究会（編）『中国女性史入門——女たちの今と昔』人文書院、2014年、p.61、80。

参考文献

日本語文献（五十音順）：

- M. フリードマン 末成道男など訳『東南中国の宗族組織』弘文堂 1991年
- 関西中国女性史研究会（編）『中国女性史入門——女たちの今と昔』人文書院 2014年
- 胡潔「古代日本の婚姻形態に関する一考察——中日両国における妻妾の呼称の相違を通じて」お茶の水女子大学人間文化研究年報・第20号 お茶の水女子大学人間文化研究科 1996年
- 瀬川昌久（編）『宗族と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』風響社 2016年
- 田原史起「農業産業化と農村リーダー——農村專業合作社成立の社会的文脈」池上彰英（編）『中国農村改革と農業産業化』日本貿易振興機構アジア経済研究所 2009年
- 馬路「徽州地区の女祠に関する一考察——女祠の祭祀、分類及び機能について——」『歴史民俗資料科学研究』22 神奈川大学民俗資料科学研究科編 2017年

中国語文献（ピンイン順）：

- 鮑樹民、鮑雷『坊林集』安徽省文芸出版社 2008年
- 毕明智「徽州女祠初考」『安徽大学学报』2 安徽大学学报編輯部 1996年
- 毕忠松、李运璋、梁燕楓「徽州古祠堂羅東舒祠建築特色浅析」『瀋陽建築大学学报（社会科学版）』16 瀋陽建築大学学报（社会科学版）編輯委員会 2014年
- 卞利『源的守望——徽州文化生態保護研究』中国社会科学出版社 2015年
- 『徽州民俗』安徽人民出版社 2005年
- 陳瑞『明清時期徽州宗族对社会問題的控制』安徽大学出版社 2007年
- 程顥『二程集』中華書局 1981年
- 程郁「清至民国的蓄妾習俗与社会变遷」2005年
- 「民国時期妾的法律地位及其变遷」『史林』上海社会科学院歴史研究所 2002年
- 鄧小平『鄧小平文選』第2卷 人民出版社 1994年
- 董妙齡「建国以来婦女干部選拔任用的歷程及其基本經驗」『河南大学学报（社会科学版）』河南大学学报編輯部 2001年
- 「中国共产党与新中国的婦女参政」『中共党史研究』中共中央党史研究室 2000年
- 東南大学建築系、歙県文物事業管理局『徽州古建築叢書——棠樾』東南大学出版社 1999年
- 費孝通『郷土中国生育制度』北京大学出版社 1998年

- 馮爾康、常建華『清人社会生活』瀋陽出版社 2001年
- 馮劍輝『近代徽商研究』合肥工業大学出版社 2009年
- 耿化敏「関与「鉄姑娘」再思考」一文幾則史実の探討『当代中国史研究』14(4)当代中国研究所 2007年
- 黄曼「从女性墓碑文看晚明節烈的表彰」『浙江海洋学院学报』29 浙江海洋学院学报編輯部 2012年
- 江巧珍、孫海峰『塩商文化象徴——棠樾』合肥工業大学出版社 2011年
- 金一虹『女性叙事与記憶』九州出版社 2007年
- 「『鉄姑娘』再思考——中国文化大革命期間の社会性別与労働」『社会学研究』1 中国社会科学院社会学研究所 2006年
- 李霞『娘家与婆家——華北農村婦女的生活空間和後台權力』社会科学文献出版社 2010年
- 劉汝驥『陶甕公牘』黄山書社 1997年
- 羅剛『千古悲歡閱滄桑 徽州古牌坊』遼寧人民出版社 2002年
- 麻勤「中国牌坊文化遺跡空間分布特征与旅游資源價值評価」南京師範大学博士前期課程学位論文 2015年
- 蘇紅『多重視角下的社会性別觀』上海大学出版社 2008年
- 唐力行『徽州宗族社会』安徽人民出版社 2005年
- 王伝満「明清徽州節烈婦女の牌坊旌表」『文山学院学报』23 文山学院学报編輯部 2010年
- 「明清徽州知識精英对節烈婦女事跡の張揚」『湖南第一師範学院学报』9 湖南第一師範学院学报編輯部 2009年
- 「徽州女祠与節烈婦女」『阿坝師範高等專科学学校学报』25 阿坝師範高等專科学学校学报編輯部 2008年
- 王振忠『徽州社会文化史探微』上海社会科学出版社 2002年
- 吳玉廉「香火繚繞中の規範与記憶：徽州地区女祠堂研究」『女学学誌：婦女与性別研究』18 台湾大学婦女研究室 2004年
- 許承尧『歙事閑談』黄山書社 2001年
- 徐柯『清稗類鈔』中華書局出版 1984年
- 張海鵬（等）『明清徽商資料選編』安徽人民出版社 1985年
- 張曉紅、梁建東「从「鉄姑娘」到「新典範」——中国女性社会角色的歴史変遷」『思想戦線』34 思想戦線編輯部 2008年
- 張小平『聚族而居柏森森——徽州古祠堂』遼寧人民出版社 2002年
- 趙華富『徽州宗族研究』安徽大学出版社 2004年
- 「徽州宗族对朱熹『家礼』の繼承与変革」『安徽大学学报（哲学社会科学版）』1 安徽大学学报編輯部 2016年
- 趙媛、麻勤、郝麗莎「中国現存牌坊文化遺跡の地域分异及成因」『地理研究』35 中国科学院地理科学与資源研究所 2016年
- 周大鳴 郭永平「性別、權力与身份建構——以大寨「鉄姑娘」為考察对象」『青海民族研究』24 青海民族大学民族学与社会学学院 2013年
- 朱熹『四庫全書 晦庵集』卷26 <http://archive.org/stream/06058060.cn#page/n90/mode/2up>
- 朱熹『朱子家礼』上海古籍出版社 1986年

族譜と地方誌（ピンイン順）：

- 安徽省地方志編纂委員会（編）『歙県志』黄山書社 2010年
- 安徽省屯溪市地方志編纂委員会（編）『屯溪市志』安徽教育出版社 1990年
- 鮑光純再編『重編歙邑棠樾鮑氏三族宗譜』乾隆二十五（1760）年
- 北京図書館古籍出版編集組『〔万曆〕揚州府志』書目文献出版社 1991年
- 鮑志道、鮑琮『棠樾鮑氏宣忠堂支譜』清代嘉慶六（1801）年
- 曹誠瑾『安徽統溪旺川曹氏宗譜』中華民國十六（1927）年
- 黄之雋等『清・乾龍二年重修江南通志』京華書局 1967年

績溪县地方志編纂委員会（編）『績溪县志』黄山書社 1998年
江蘇古籍出版社『中国地方志集成安徽府県誌輯 48 道光徽州府志』江蘇古籍出版社 1998年
江蘇古籍出版社『中国地方志集成安徽府県誌輯 51 民国歙県志』江蘇古籍出版社 1998年
休寧县地方志編纂委員会（編）『休寧县誌』黄山書社 2012年
休寧县地方志編纂委員会（編）『休寧县志』安徽教育出版社 1990年
中共上庄村党支部、上庄村委員会『上庄村誌』内刊 2009年
朱益新（編）『歙県志』中華書局 1995年